
Luce e Ombra ~ 光と影 ~

白川八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L u c e e O m b r a 光と影

【Nコード】

N 3 7 1 3 W

【作者名】

白川八雲

【あらすじ】

異能の力を持つ者——能力者と呼ばれる者たちが通う学園に編入する予定だった主人公は、自分の能力を持て余し気味に過ごしていた。

そんな中、彼は偵察と称してその街に一足早く足を運んだ。しかし、到着したその日、彼はそこで異形の化物と遭遇してしまい、難なく撃破してしまう。

そして彼はこれを契機に様々な事件へと身を投じていった。

プロローグ

その日は、幾重にも重なった雲が太陽の光を遮っていた。

四月を迎えるまであと少しだと言うのに、気分の上がらない天気だった。

それでも、休日ということもあり、その繁華街は大勢の客で賑わっていた。

「随分と小奇麗な街だな」

近代的で明るく整った街並みは、独特の雰囲気と清潔感を演出していた。

老若男女様々な人種が入り混じったグローバルな現代において、近代的と言うのは既に当たり前となっていた。

薄汚く埃っぽいスラム街を彷彿とさせるような街並みは、論外と言ってもおかしくはない時代なのだ。

そのため、辺りを歩く人々は、みな一様に洒落た服で着飾っていた。

そんな小奇麗な街を一人の少年が優雅に歩いていた。

黒を基調としたシックな服装の少年は、その歩き方からも感じられる気品ある雰囲気とも相俟って、道行く人々の視線を集めていた。

しかし、少年は少しも気にすることなく歩いて行く。

その視界に、ちらりと何かが映った。

なにやら殺気立った様子で裏路地に入って行く複数の男達。

見るからに怪しい。

その様子に興味を抱いた少年は、その男達の後を追うように裏路地へと足を踏み入れて行った。

月島秀樹は、ある廃ビルに向かっていた。

月島は、数分前にシャドウ本部に入った連絡を思い出していた。内容は廃ビル内でのセキュリティーが銃撃戦。それなら何ら珍しいことではない。

最近は残虐な事件が多い。そのため、治安を守るために組織されたグループ、セキュリティーは昼夜を問わず駆り出されていた。しかし問題なのは、それを通報した者だ。

なんとセキュリティーが通報して来たのだ。

オペレーターの唯によると、銃撃の音と共にセキュリティーの悲鳴まで聞こえてきたと言うのだ。

セキュリティーは、元々それ専門の訓練を受けた人々で構成されているため、他の組織であるシャドウに救援の要請などありえない。それが悲鳴交じりに通報してくるということは、よほど自体が切迫していた事を物語っていた。

学園の要請で月島が到着した時には、ビルの周辺は静かになっていた。

街外れにあるその廃ビルは、元々五階建ての雑居ビルだったらしいが今は見る影もなく所々が剥げていた。

そんな印象とどんよりとした天候が相俟って、まだ昼下がりだと言うのにどこか寒気がした。

応援を待つべきか否か考えたが、今は負傷者がいる可能性を考えた月島は意を決すと足を踏み入れた。

「（やけに静かだな……）」

廃ビルということもあり、中には何もなく床や壁は剥がされ、コンクリートや鉄骨が見えていた。

慎重に足音を気にしながら歩くがどうしても靴が床と擦れ合い生じた音が響いてしまう。逆に言えばそれほど静まり返っているのだ。

万一の場合に備え銃を構える。発砲許可及び能力行使許可は既に降りていた。

一階のフロアをすべて見回ってみたが、何も見当たらなかった。続けて二階も慎重に見回ったが、結果は同じだった。

「（もしかして悪戯か？）」

疑問に思い始めながら三階に上ろうと階段を途中まで上がったところでそんな疑問はすべて吹き飛んだ。

「（この匂いは……！？）」

湿った鉄のような匂いが階段を上るにつれて強くなっていく。月島の心臓が鼓動を急激に早め、嫌な汗が全身から噴き出してくる。

三階に到着した月島はあまりの惨状に目を覆いなくなった。

惨すぎる、そこには地獄絵図となんら変わらない光景が広がっていた。

元は人であったであろう肉片は床に散らばり、真っ赤な血は天井から滴り落ちる程だった。

「（落ち着くんだ。生存者だ。とにかく今は生存者を探すんだ……！）」

月島は必死に自分に言い聞かせた。

銃を構えながら恐る恐る見渡す。

辺りには排出された大量の薬莢と硝煙の匂いがした。

硝煙弾雨、銃撃戦の跡が生々しく残っている。

薬莢のサイズから考えてマシンガンレベルの武器を撃ちまくったようだった。だとすればこのセキュリティは重装備の部類に入る。それですらこの様だ。

彼らの傷口は銃弾などで撃ち抜かれたような通常の武器の傷ではない。

これだけ大勢の人数を骨ごと切断している点から考えても、何かしらの能力者と考えた方が妥当だろう。

そこまで考えた月島は悪寒が走るのを感じた。

ここまで戸惑い無く人を無残に殺せる相手がもしまだこのビルの中にいたとしたら――。

果たして捕獲することが自分にできるだろうか。

考えただけでも身震いが起きる。

身体に纏わりつくような汗が再度噴き出した。

その時、辺りにカツンと音が響いた。

月島は勢いよく振り向き、音のする方向にゆっくりと歩みを進めた。

音の発信源は、隣の部屋へと繋がる大きく開いたドアの向こう側からだった。

ゆっくりと近づくと何かが動いているのが見えた。

「動くな！」

銃を構え、弱気になっている自分を奮い立たせる意味も込めて月島は大きく叫んだ。

その何かは一瞬動きを止めるとゆっくりとこちらを振り返った。

「（人間じゃない!?）」

月島はその姿を見て驚愕した。

それはボロボロの黒い布を羽織った奇妙な人型の何か。

露出した頭部や、チラチラと見える肉のない腕は人骨を連想させた。

文献などの挿絵で見かける死神そっくりだ。

その化物が奇声を上げると、何処からともなくさらに二体ほど現

れて月島を囲った。

手には巨大な鎌や鋏を持ち、冗談ではなく本当に死神そっくりだった。

「一体何がどうなってる!？」

奇声を発して鎌を振り下ろしてきたのを月島は、咄嗟に後方に跳び躲した。

振り下ろされた鎌は、コンクリートに刺さった。

それも豆腐に箸を突き刺すように簡単に。

骨だけに見える腕の腕力が強いのか、鈍にしか見えない鎌の切れ味が異常なのか、あるいは両方かも知れない。

コンクリートの地面に刺さった鎌を簡単に引き抜くと今度はスピードを上げて突進してきた。

「（とにかく反撃しないと……!）」

姿勢を低くして鎌の一撃を躲した月島は足払いをしようとしたが、石に蹴りを入れたような鈍い音がして自分にダメージが入っただけだった。

「（……！結構頑丈だな）」

近接戦闘ではダメージを与えられないと考えた月島は、一旦距離を取るために銃で牽制することにした。

足元に当たるように発砲した銃弾に死神もどきは一步後退した。

一応避けるということとは、当たればそれなりのダメージを相手も喰うことになるのだろう。

少々荒っぽい手段だが足を狙って動きを封じることにした。

一発二発と銃弾が命中し脚部が崩れるように碎けた。

死神もどきは、足がなくなった状態でも手だけで這うように動く。ホラー映画と何ら変わらない。そんな感想を抱いていると当然のように残りの二体が月島に襲いかかってきた。

それをバク転の勢いで躲し、今度は近距離で銃弾を見舞った。

今度は簡単に脚部が碎けた。

「なんとか、なったか……!？」

月島は驚愕に目を見開いた。砕いた筈の脚部に砂が集まり、再生していったのだ。

「おいおい、冗談だろ……」

これでは捕獲は不可能だ。月島は瞬時にそう判断した。完全制圧をすべく能力を使用することを決めた月島は、赤いブレスレッド型の分散装置を外した。

月島の能力は、炎を創り出し自在に操る能力。

本人曰く、真っ赤に燃え上がる炎をバツクに戦ってみたいらしい。月島は、素早く使用する銃のマガジンを能力使用時専用に開発された銃弾に入れ替えた。

放たれた炎を帯びた銃弾により頭部が砕け散り、死神もどきが砂のように崩れた。

「まずは一体目！」

どうやら頭を潰せばすべての制御機能を失うらしく、それ以降動きはしなかった。

さらに、どう言うわけか動かなくなった死神もどきは、砂のように崩れ、形を無くしてしまった。

それを見た月島は、距離を取りつつ残りの二体も同じように倒した。

自分がつくづく能力者でよかったと月島は思う。

もし能力がなければ恐らく自分はもつと苦戦を強いられていたはずだ。

ただ、こいつらはそれなりに再生力と強度があるが、基本的に動作は遅い、あれだけの装備と数のセキュリティが負けるとは思えない。

負けるとすれば、数十体に囲まれたか、あるいは他に第三の勢力がいたと考える方が妥当だ。

月島は嫌な予感しかしなかった。

もしかしたらまだいるかもしれない。

そんな事を考えていると背後から声が聞こえた。

「面白い装置だな」

聞き慣れない声に振り返ると、黒を基調とした服装で自分と同じ十六くらいの年齢に見える少年が立っていた。

一瞬生存者かと思ったが月島はその考えをすぐに打ち消した。

少年の妙に落ち着き払った態度が引つかかったのだ。

そう、生存者にしては冷静すぎるのだ。この惨状を目の当たりにしながらも一切動じた様子はない。

月島は確信した。

この少年は何らかの形でこの事件に関係している。

恐らく——真犯人だ。

「お前を殺人の容疑で現行犯逮捕する。お前には黙秘——」

「ほう、随分と早計な奴だな」

少年は、この状況にそぐわず呆れたような声で言った。その時少年の背後に砂の柱が出来た。

月島が倒した死神もどきは、砂になって消えた。

しかし今度は、その砂から死神もどきが十五体ほど現れた。

「なっ！？さっきの倍以上じゃねえか」

たじろぐ月島を余所に少年は極めて冷静に死神もどきを観察していた。

「そこを動くな」

そう言う少年は死神もどきの群れにゆっくりと歩いて行く。

すると先程までその場に留まっていた死神もどきたちが一斉に奇声を上げて少年に向かって行った。

気配が変わったのだ。

先程とは比べ物にならない位の殺気を少年が放ち始めたからだ。

例えるのなら、抜身の刀だ。それも鋭く研ぎ澄まされた。

少年は、鎌や鋏の攻撃を軽くあしらうように躲しながら、両側にいた二体を裏拳で吹き飛ばした。

「随分と硬いな……」

右手をぶらぶらと振りながら感想を述べた。すると少年の両手に

は、いつの間にか漆黒と白銀の銃が握られていた。

その銃の片方を死神もどきに叩きつけ、もう片方でゼロ距離から撃ち抜く。

撃ち抜かれた死神もどきは、無残に砂となって消えた。

月島はただ茫然とその光景を眺めている事しかできなかった。

少年は、ただの銃撃と体術だけで死神もどきを倒している。技術的な差が歴然だった。

月島が啞然としている間に少年は、次々と哀れな死神もどきたちを撃破していった。

銃撃でよろけた死神もどきの頭部に容赦なく回し蹴りを入れ壁に激突させたり、鎌を奪い取りそのまま袈裟懸けに大きく切り裂いたり、やりたい放題だった。

強すぎる。

月島の頭にはその言葉しか浮かばなかった。

そうこうしているうちに十五体ほどいた死神もどきの群れは消え去った。

少年は、服に付いた埃を払うような仕草をしながら辺りを見渡していた。

「危ねえ！」

少年がついさつき蹴り飛ばした死神もどきが斬りかかろうとしていた。

月島は、思わず少年の間に割り込み自らが盾となった。

鎌が大きく振り下ろされ、これから襲うであろう痛みを覚悟し目を瞑る。

しかし肉が切り裂かれる鈍い音はせずに辺りには一発の銃声が響いただけだった。

「自分を犠牲にしても他人を守る。戦士には向かない性格だな」少年が放った銃弾は、見事に死神もどきの頭部を吹き飛ばしていた。

「せっかく助けてやったのに、なんだよその言い方は！」

「だが、事実だ」

何から何まで調子が狂う。

凄惨な現場を見て、不気味な化物と戦ってさらに正体不明の少年に助けられる。

もうどうでもいい。早く家に帰って寝たい。

月島は天を仰ぎ心の底からそう思った。

「なあお前、一体何者——」

振り返るとそこには誰もいなかった。

音も無く現れ音も無く消える。忍者のような奴だ。

月島はあの少年が無能力者だとは思えなかった。

少なくとも自分と同じランクB、もしくはランクA以上かもしれない。

どちらにしても本気を見ていないから判断のしようがない。

「はあ……」

溜息が出た。

「どうすりゃいいんだ、報告書……」

遠くから聞こえる学園が派遣した増援部隊のサイレンが、虚しくその場に木霊した。

ブローグ（後書き）

初投稿作品なので、文章内容で改善すべき点などの意見があれば
どうぞご指摘ください。

尚誤字脱字などの報告もあればお願いします。

【STAGE 01】

白崎綾乃は上機嫌だった。

今訪れている店の名前は、Bistro la ciel。

店内は居酒屋というより洒落た雰囲気のレストランと言った方がしっくりくる。

高校でも仲がよく、親友である上村葵が案内してくれた店だ。

自分には少し冷たい印象があるのは周りの反応から薄々感じていたため、こうして休日に友達と楽しく外出できるのは、綾乃にとっても楽しかった。

その店に、綾乃は同じく親友の仲村唯と訪れていた。

「よくこんな店を見つけれられたな」

「前に偶然入ったら、いい感じの店だなんて思ったの」

「この店の落ち着いた雰囲気は、あおりんにピッタリだね」

店の柔らかい雰囲気は、店主である女性からも感じられた。

「二人に気に入ってもらってよかった」

にっこりと微笑む葵は、本当に嬉しそうニコニコしていた。

「む、ここのティラミスは美味しいな」

「このオレンジのシフォンケーキも美味しいね」

「あたしのフルーツのロールケーキも美味しいよ？」

お互い自分が注文したスイーツを少し分けて、食べ比べをする事にした。

交換しそれぞれ感想を述べていくが、大体が美味しいで統一されていた。

しかしそれは決して、彼女たちがボキャブラリー不足と言っわけではない。

本当に美味しい物を食べれば、美味しいとしか言いようがなくなるものだ。

ただ、その摂取したカロリーが年頃の少女である葵と唯には気が

かりだった。

綾乃はと言えば、そんなものを気にした様子もなくティラミスを美味しそうに食べている。

綾乃のスレンダーと言える体型はいくら食べても変わる事がない。最も、彼女は元々それほど食べる方ではない為当たり前とは言えば当たり前の話だが。

しかし、当の本人は、できれば胸部に脂肪が行ってほしいと切に願っていた。

そんな彼女のささやかな願いを知る由もない二人の少女は、その光景を羨ましそうに眺めていた。

「どうした、私の顔に何かついてるのか？」

二人の少女から羨むような視線を感じ、綾乃はティラミスを食べる作業と止めた。

「うつん、なんでもないよ。ね、唯」

「うん、そうだねあおりん」

誤魔化すような言い方を妙に思ったが、綾乃は追及しようとは思わなかった、今は目の前のティラミスに夢中なのだ。

葵や唯が頼んだ物も悪くはないが、自分にはどうしてもビター風味の物の方が食べやく感じてしまう。

程よく苦みの効いたこの店のティラミスは、瞬く間に綾乃のお気に入り追加された。

「つつきーも誘えばよかったかな」

「唯って本当に月島の事好きだよね」

唯がぽつりと呟いたのを聞いた葵が、意地の悪い笑みを浮かべて見詰める。

「そ、そんなことないよ。つつきーはただの幼馴染ってだけで。だ、大体あんなヘタレなんか別に……」

そんな二人を綾乃は黙って傾聴していた。

それに例え唯の返答が本心だとしても、月島を信頼している事だけは確かだろう。

何より、月島の話をする時の唯は輝いている。

葵のからかいに対して特別迷惑そうな顔をするのもないので、月島の事を言われ内心嬉しかったりするのかもしれない。

「と・に・か・く！つきーはそんなじゃないの」

「必死に否定してるところが逆に怪しいなあ」

葵は相変わらず意地の悪い笑みを浮かべている。

唯はと言えば既にその顔は真っ赤に染まってしまっている。

「（唯は可愛いな）」

顔を朱に染めながら否定するその姿は、まるで初恋の相手が姉にばれてからかわれる妹の姿のようだ。

「あおりん、あたしにばっか聞かないでさ、たまにはあやのんにも聞いてみてよ」

このままではまずいと感じたのか唯は、話題の方向を自分から逸らすことにしたようだ。

「それもそうだね。ねえ、綾乃ってどういう人が好みなの？」

「そうだな……」

突然話題を振られ、それまで傾聴していた綾乃は二人に向き直る。キラキラとした純真な瞳が綾乃に早く答えを、と訴えていた。

「私より強い奴だな」

「綾乃より強い人って、なかなかいないと思うよ？」

「うん」

綾乃の返答に葵と唯はそろって顔を見合わせた。

「なら葵はどういう男が好みなんだ？」

突然話題を振られた仕返しとばかりに綾乃は葵に尋ねた。

「うーん、優しい人とか、面白い人？なのかな。こういうのって自分じゃよく分かんないんだよね」

「……そういうものなのか」

「なるほど」

みんなのお姉さんのポジションの葵が、こういうのだから、恋と言うのは難しい物なのだと綾乃は思った。

そうしてたわいもない雑談を繰り返しているうちに、お昼時を迎え、店内が大分混雑し始めてきた。

店の営業のためにも、そろそろ出ようかと算段していた彼女たちの隣に三人の男達がどかと座った。

それまでの店内の落ち着いた雰囲気が一気に壊れた気がした。

正直な話、この男達は浮いていたのだ。

洒落た店内に武骨な男達が三人、浮かない方がおかしい。

だが、店の雰囲気合わない客だからと言って無粋な差別するわけにはいかない。

純粹にこの店を気に入ってくれているのかもしれない。

しかし、そんな考えはすぐに打ち消された。

彼らは喫煙席でもないのに煙草を吸いだしたのだ。

店内には大人よりも、子供——未成年者の客の方が圧倒的に多い、にも拘らず喫煙である。

途端に綾乃は不機嫌さを露わにした。

「綾乃、抑えて。他のお客さんもいるんだから、ね？」

「止めるな、こういうのは注意するものだろう」

「それはそうんだけど、ここで喧嘩したらお店にも迷惑がかかったらうよ」

口ではそう言い宥めている葵もどうやら頭にきているらしく、鋭い眼光で男達を睨んでいた。

女が男を相手に力で勝てるわけがない。普通はそうなのだが、彼女たちは違う。

能力者と呼ばれる部類に入っているからだ。

フリーエナジー

彼女たち能力者は、皆一様にF・Eと呼ばれる未だ研究の進んでいない未知の粒子を扱うことが出来る。

またこの粒子を武器に転用した場合は半永久的に使用できる非常に優れたエネルギーでもある。

能力者達はそれぞれ六段階評価で能力適性ランクを設定されており、上から順に、S、A、B、C、D、E、となっている。

六段階評価を設けているとはいっても、ランクSの認定を受けている者は片手で数えられるほどしかいないため、実質的にはランクAが最高ランクになっている。

そして綾乃と葵はそのランクA。

その辺にいるようなチンピラに負けるようなことはないのだ。

とは言え、綾乃たちも常に自由に能力を発動できるわけではない、普段はFECフリー・エナジー・キャンセラーと呼ばれるある種の妨害装置を身に着けてほとんど能力を使用できない状況にしているが、自衛のための使用なら黙認されることも多い。

そんな背景もあり男が力で女を支配する時代は、とうの昔に終わりを告げていた。

今は、ある意味で男女平等の時代なのだ。

男達の手元にあるお冷を顔にかけてやりたいが、そんな事したら衝突は確実だろう。

葵に止められ煮え切らない想いがあるが、しぶしぶ席に着いた。

そんな綾乃の思考を読んだかのように誰かが男達の一人に水をかけた。

「子供の客が多いのに煙草を吸うとは、大人としての常識が足りないんじゃないのか？」

歳は自分たちと同じくらいで、整った顔立ち、艶やかな黒髪、陶磁器のように白い肌の少年がそこにいた。

「はあ！？灰皿が置いてあるって事は吸っていいって事だろ！？」

「お前、調子乗ってんじゃないやねえよ！！このモヤシ」

途端、少年は襟首を掴まれた。

相手の言い分もある意味正しいと言えるが、生憎男達が座っている席は禁煙指定されていた。

「綾乃、これまずいよ」

葵が、言う。

確かにその通りだ、これは助けなくてはならない。

このままでは少年がやられてしまう。

しかし、そんな事態にはならなかった。

「恥を知れ、消え失せろ」

「お、覚えてやがれ」

何とも懐かしい台詞を吐きながら、男達は出て行った。

少年は店内を荒らさず男達を殴って、撃退した。

流れるような手捌き、並の人間ではない。

体躯から考えて少年は高校生くらいの筈だが、膂力では勝っているであろう男達をいとも簡単に倒して見せた。

店内から拍手が起こった。

もちろんそれは少年に対する賞賛だった。

「お前、何者だ？」

そんな中で綾乃のみが好戦的な目で見ていた。

この少年に興味が湧いたのだ。

「ほう、初対面の相手に随分と高圧的な態度だな」

身長差で見上げる格好の綾乃と見下げる格好の少年。

まるで因縁でもあるかのような無言の応酬が繰り広げられていた。

「ま、待つて。ほら、綾乃もそんなに睨まないで。あなたも、煽るような事言わないでください」

またしても葵に止められた。

「ふん、しょうがないな……」

綾乃は、再度しぶしぶと言った様子で席に戻った。

気まずい空気が流れるが、少年はそれ以上何も言わなかった。

そこに一本の電話が入った。

葵の携帯が鳴ったのだ。

「え？はい、わかりました。すぐに向かいます」

「あおりん、何の電話？」

「ちよつと用事が出来たみたい。あの、さっきは困っていたのを助けてくれてありがとうございます」

その仕草で何の電話か理解した綾乃たちは、席を立った。

急いで帰る支度をしながら葵は、隣で優雅に紅茶を飲む少年に礼した。

「気にするな、俺は気にしない」

少年の口から出た言葉に思わず笑いそうになった。

勘定を済ませ表に出ると、そこには車が止まっていた。中の運転手が乗れと指示を出している。

綾乃たちはその車に乗り込んだ。

「目的地は、ここからそう遠くない建設途中のビルだ」

「アンノウンが出たと言うのは、本当なんですか？」

「ああ、しかも今回はかなり多いらしい。君達も気をつけてくれ」

「分かっている」

通信機を付けながらの会話は短く終了した。

綾乃と葵に声をかけた運転手は、そのままスピードを一気にあげた。

目的地に着くと、綾乃と葵はすぐに降りると辺りを警戒しだした。唯もしっかり通信機を付け、オペレーターとしていつでも指示を出せるように準備をしていた。

聞こえますか？

「ああ、よく聞こえる。それでアンノウンはどこにいるんだ？」

通信機を通して唯の声が聞こえる。

データによると、つつき——月島が二階ホールで応戦中。本部からは、ビルの損傷は構わず殲滅しろとの事です

「分かった。それと無理して直さなくてもいいと私は思うぞ？」

唯は、月島秀樹を呼ぶ時に決まって『つつき』と呼ぶ。

彼女は元々あだ名をつけて呼ぶのが趣味のようで、自分も『あやのん』と呼ばれている。

本来、こう言った場面ではそう言った私情を挟むのは論外だが、

綾乃からしてみればそんな事は関係ない。

なにより幼馴染が前線で戦っているのだ、心配ではない筈がない。ならば、少しでも楽な気持ちでいられた方がいいに決まっている。ありがとう、あやのん

軽く微笑んでから綾乃は、葵と共に二階を目指して階段を昇って行った。

月島秀樹は、休日を謳歌しようとお昼ごろに起きた。

たまには外で食べるのもいいだろうと、家を出て向かったファミレスにて丁度ご飯が来たところで電話も着た。

何の用かと出てみれば、そこには矢車美咲と書かれた文字がディスプレイに表示されていた。

同時に月島に冷や汗が浮かぶ。

「……はい、もしもし」

月島くん、仕事よ。位置情報は送るから急いで向かって

美咲は、月島の所属するグループ、シャドウの責任者で、基本的に厳しい人物だが、グループ名のシャドウ——陰、その名の通り陰からでも人の役に立つことは目立たなくてもやれ、を心情に行動する人物でもある。

月島曰く、怒ると物凄く怖い。

「はい……わかりました……」

運ばれてきた料理を少しだけ摘み、勿体無いと思いながら会計を済ませ店を飛び出した。

結局のところ、セキュリティにしてもシャドウにしても、どちらのチームも表立った行動はあまりできない組織なのだ。

この組織は、元の統括者は同じだが、その下でいくつもの分岐を

果たした組織であるため、個々のチームでの自由裁量で活動するケースが多くみられ、結果的にチームごとの連携が悪くなる場合も多い。

さらに、組織の存在は情報漏洩を恐れた徹底した秘密主義により秘匿されており、所属している月島さえその全容を知ることが出来ない。

そんな中で、各グループにある命令が下された。

『アンノウンは見つけ次第掃討せよ』

これにより、月島のような学生でありながら組織に属する人間は、このように休日は悉く呼び出されるのだ。

「（俺のお食事タイムを奪いやがって……。アンノウン、絶対に許さねえ……！！）」

動機は不純だが、アンノウンを倒す理由が出来た。

現場に着いた月島は途方に暮れていた。

目の前には、つい最近交戦したばかりの死神もどき——アンノウンの群れが予想以上にいた。

あの後、月島が報告書の作成に二進も三進もしている間に、正式な名称が決まっていた。

アンノウン
未知の生物、言いえて妙な名前だ。

しかも、回収された砂を解析した結果、未知の細胞が見つかった。未知の生物から未知の細胞が発見される。

十分に予想可能な内容だった。

アンノウンに名称をつけるのと同時にその細胞にも名がつけられた。

M u t a n t 細胞、突然変異細胞と名付けられ、その頭文字を取って、M細胞。

特徴としては、特に、強い再生能力が挙げられた。なるほど、それである時足がすぐに再生したのか、と月島は一人

で納得した。

「うわっ、あぶねえ」

四方八方から迫りくる鎌を紙一重で避けては、頭を打ち抜く作業を繰り返す。

正直嫌な気分だ。

アンノウンは人を襲う。

何故襲うのかは分からないが、自分たちはそれを未然に防ぐ為に秘密裏に戦っている。

しかし、アンノウンは幾ら倒しても無限を思われるほど頻繁に現れる。

加えて自分たちは生身だ。

幾ら能力者でも圧倒的な物量には敵わない。

そう何度も無傷で撃退できるはずもない。

「（アンノウンのについて調べる必要があるそうだな）」

月島は、このゼロサムゲームにも似た無限ループを終わらせるために、原因究明をすることを決めた。

「月島、生きてるか!？」

綾乃は、何やら鬱陶しそうにアンノウンを倒している月島を見つけた。

一応、無事である事を確認するために声をかけた。

残りは一体、これなら大丈夫だろうが、油断は禁物だ。

「ああ、生きてるよ」

怪我一つ負ってはいなかった。

「唯もこれなら安心だね」

葵がそう言っていると月島の表情が変わった。

「唯も来てるのか？」

食いつくところはそこなのか？と言う突っ込みは野暮だろう。つつきー！！そんな事より前見て、あの個体の様子がおかしい

「何！？」

唯の通信に綾乃たちは前方を確認する。

確かに動きのおかしい個体がいた。

何これ……表面温度が上がってる。気をつけて、どうなるかわからないから

唯の言葉と同時に、アンノウンの外装が融け出し、元より一回り大きくなったアンノウンが出てきた。

「脱皮でもしやがったのか！？」

それは脱皮というよりは、再構成に近かった。

体を覆う布は融けるようにしてアンノウンの肌に吸着していく。

骨のごつごつとした感じはなくなり、いくらかシャープになったボディライン。

身に纏うのはボロボロの布ではなく、鱗のような装甲に変わっていき、最後に四つん這いの姿勢になる事でその変化は落ち着いた。

武器も変わったらしく、鎌の変わりに両腕にブレード状の刃物が仕込まれていた。

唖然とする三人に対して形態変化を果たした新型のアンノウンが耳を劈くような咆哮を上げた。

あまりの煩さに鼓膜が破れそうだ。

現に通信機が故障したらしく、唯の声が聞こえなくなった。

そして咆哮を終えたアンノウンが高速で突っ込んできた。

それに反応した月島が、綾乃と葵を突き飛ばす。

月島の体は大きく後方に吹き飛ばされた。

目を開けると粉塵が舞っている。

辺りからはパラパラと粉が落ちてきた。

「……ッ！！」

起き上がろうと力を込めると、全身に激痛が走る。

しかし、その中にもう一つの痛みが混じっていた。
見ると自分の体に鎖が巻かれて、宙を舞っていた。

「月島！！大丈夫！？」

「ああ、それよりサンキューな」

自分が先程までいたところを見れば、そこは跡形もなく引き裂かれていた。

葵が能力で鎖を生成して、月島をここまで飛ばしたのだ。
これを喰らっていれば――。

自分は即死だった。

月島の脳裏に嫌な未来が浮かんだ。

葵の判断が無ければ、自分はその最悪の未来を辿っていただろう。
そしてその元凶が再度こちらに突撃してくる。

同時に、綾乃と葵の攻撃もアンノウンに命中した。

しかし、それらはすべて弾かれた。

「やべえー！！」

月島は、驚愕に彩られた表情の少女二人の襟首を掴み、痛む体に無理を言い思いつき後方へと大きく跳躍した。

その直後、自分たちがいたところのコンクリートの床が切断された。

「ありがとう月島」

「……ふん」

素直に礼を言う葵に比べ綾乃は少し不服そうだった。

恐らくあんなの自分でも避けられたと言いたいのだろう。

「お互い様だろ」

それぞれ礼を述べる二人に月島は、そう返しアンノウンを見据える。

すると、そのアンノウンが突然腕を振るった。

月島はそれがなんとなく遠距離武器の予感がした。

予想通り相手は、鱗の部分を手裏剣のように飛ばしてきた。

月島は咄嗟に撃ち落とす為に銃弾を放った。

いくつか撃ち落とすことに成功したが、それでも数が多く撃ち零したものを横に転がり回避した。

飛ばした鱗がコンクリートに穴をあける。

攻撃は予想通りだったが、攻撃力は予想以上だったのだ。相当な威力だ。

「なんつー威力だ。こりや直撃はやべえ」

初めて見るタイプだった。

新型のアンノウンは、元と同じで肉体を行使して戦うタイプだが、違うことと言えば、その動きだ。

それこそ最初のアンノウンは比べ物にならない程に素早く、隙がなくなっていた。

「近距離はあのブレードで来るだろうし、遠距離はあの鱗。ちょっとまずいことになったね」

葵が冷静に分析を始める。

そうして再び三人が固まったところに物凄いスピードで突撃し、腕のブレードを広げた。

掠っただけでも危険なのは、分かっている。

三人ともそれぞれ別方向に回避する。

距離をとれば鱗手裏剣で攻撃し、隙があれば猛スピードの突進からくるブレードによる近距離攻撃。

反撃しようにもその装甲は、銃弾など軽く弾く強度だ。

正直ランクBとは言え、まだまだ不安定な自分の炎ではどうしようもない。

そこである作戦を思いつく。

「葵、お前の能力であいつを拘束できないか？」

「拘束？できないかとは思っけど、多分一瞬だよ」

「その一瞬の間さえあれば、白崎、お前ならできるよな？」

「何をだ？」

「だから、一瞬であいつを仕留めるだけの攻撃力を持った武器、創れるよな？」

そこまで聞いて綾乃と葵は、月島の考えている事を理解した。

「ああ、任せておけ」

綾乃がニヤリと笑った。

「俺が合図したら頼む」

そう言つと月島は、注意を引き付ける為にアンノウンに向かって行つた。

「葵、準備を頼む」

「うん、分かつてるよ」

綾乃の言葉を受けて葵は、能力を発動させた。

葵の能力は物質の操作系に分類され、自ら発したF・Eで制御区域を作成し、その範囲内のものを操ることが出来る。

ただし、生物などを操ることは出来ない。

葵はアンノウンを拘束するために、ビル内の鉄骨を崩壊しない程度に抜き取った。

幾ら少しとは言え、基礎を抜かれてしまったこのビルはもう一度一から作り直しになるだろう。

月島は今、相当無理をしている。

最初に自分たちを庇った際に受けた傷は、最悪骨を砕いている可能性が高い。

コンクリートに生身の人間が激突し、さらにそれが壁をへこませるほどの衝撃ならば、そうなつていてもおかしくはない。

故に迷っている暇などないのだ。

葵は、ビルから抜き取った鉄骨を鎖状に変化させ、月島の合図を待つ。

「葵、今だ！！」

合図と共にコンクリートの床を突き破り、現れた鎖にアンノウンは瞬く間に拘束される。

「動きは止めたよ！」

「後は任せろ！」

綾乃が扱う能力は、創造系と呼ばれ、自ら発するF・Eから武器を作成することが出来る。

それは災いを封じたパンドラの箱のように、数多くの武器を作成し、破壊をまき散らす。

そんな無数の武器を無制限に生成できる彼女が思い浮かべたのは、レールカノン。

その圧倒的な攻撃力の前には、ヘリですら墜落する。

しかし、アンノウンも必死にもがきブレードで鎖を断ち切ると、鱗手裏剣を無造作に投げた。

そしてその一枚が綾乃の脇腹を掠めた。

「クツ！吹き飛ばー！！」

綾乃は痛みには耐え、咆哮と共に撃ち出された青白い閃光は、僅かに軌道がずれたもののアンノウンを直撃した。

直撃による衝撃で、辺りに砂塵が舞う。

砂塵のせいで視界が優れず相手の状態が窺えない。

「倒せたか……？」

月島の疑問に答えるが如く、アンノウンは砂塵の中、雄叫びを上げた。

そう、アンノウンはまだ倒れてはいなかった。

「予想以上にしぶといね」

「まさかアレを喰らって生きているとはな……」

葵も綾乃も驚きを隠せなかった。

風が吹き、視界が晴れていく。

直撃した部分である胸部には、大きな穴が開いていた。

その穴の周辺は、衝撃のせいか焦げて爛れていた。

いくら銃弾を弾く装甲とは言え、流石に電磁投射砲までは防ぐことは出来ないようだった。

最初に比べ速度の落ちた突進は、目視でも軽く追えた。

綾乃は、絶対に外さない為にも限界まで引き寄せる。

アンノウンとの距離は五メートルをきった。

しかし、照準をその頭部へと定めたまま綾乃はまだ発射しない。距離が残り三メートルとなった時、再度破壊の衝撃を放った。

近距離理での砲撃にアンノウンは大きく後方へと吹き飛ぶ。

空中で大きく仰け反り、そのまま仰向けに地面へと落下した。

二度目の破壊の衝撃は、コンクリートの壁を貫通し、粉塵を上げた。

頭部を吹き飛ばされたアンノウンは、今度こそピクリとも動かなかった。

「……今度こそ、倒したよな？」

月島が確認するように言った。

その時、パキン、と何かが割れる音が辺りに響いた。

三人は、咄嗟に身構える。

アンノウンが白くなり、割れたのだ。

そのまま白い粉となったアンノウンは、風に乗って消えてしまった。

アンノウンが消え、月島、綾乃、葵の三人が取り残されるように立っていた。

「もう二度と戦いたくないな」

月島は、ずるずると壁にもたれながら座り込んだ。

「お疲れ月島。綾乃、傷は大丈夫？」

「まあ、月島に比べれば、大したことはないな」

「とりあえず、一件落着いてことで」

その言葉に、緊張が解け綾乃も葵も、その場に座り込んだ。

それにしても手強い相手だった。

たかが一匹形態変化しただけでこの強さ、異常とも言えた。

「さて、それじゃあまずは病院行こうぜ」

苦痛の表情を浮かべつつ立ち上がる月島に、綾乃も葵も同意見だ。葵はともかく、月島と綾乃はすぐに病院に行って処置を受けたほうがいいだろう。

綾乃は葵に肩で支えてもらいながら立ち上がった。

三人がその場を離れようとした時、壁を突き破り、先程のアンノウンが二体も現れた。

「まさか、まだ他にもいたのか……！」

葵の肩に回した腕を解き、臨戦態勢に入る。

だが、三人とも先程の戦いで相当な体力を消耗している。

このままでは恐らく殺られてしまうだろう。

「戦略的撤退も考えた方が良さそうだなぞ？」

月島が、引き攣った表情で言う。

確かにその通りだ、月島はすでに戦闘不能に近い状態、綾乃も先程のように激しい攻防は難しいだろう。

「葵、ここは本当に撤退した方が良さそうだ」

「そうだね。でも、敵がそうはさせてくれないみたいだよ」

両腕を振るモーション、先程見た鱗手裏剣だ。

三人とも姿勢を低くしてかわす、しかし次の瞬間にはもう一体のアンノウンが目の前に迫っていた。

残酷なブレードが三人に振り下ろされる。

殺される、誰もがそう思った時、そのアンノウンが突然後方に吹き飛ばされた。

振り返った三人はそれぞれ驚愕の表情を浮かべた。

月島は廃墟で出会った少年。

綾乃と葵はついさっき喫茶店で出会った少年。

「待て、あれはそう簡単に倒せる相手じゃない」

自分たちを守るように前に立った少年に、綾乃は下がるように言う。

「心配してくれるのか？」

少年は飄々と答えた。

そんな少年にアンノウンは、再度鱗手裏剣を飛ばした。

「避ける！」

少年に向けて綾乃が叫ぶ。

「甘い」

そう呟くと少年は、手にした漆黒と白銀の美しい二丁の銃でその鱗を軽々と撃ち落とし、本体にまで銃弾を直撃させた。

遠距離が効かないと見たアンノウンは、近接武器であるブレードを広げ物凄い速度で突進してきた。

しかし少年もそれに反応し、半歩下がっただけで初斬を躲した。そのまま、銃を構え腹部に銃弾を撃ち込む。

その銃弾は装甲に阻まれることなく貫通し、アンノウンの腹部から黒っぽい液体が噴出した。

綺麗とは言えない色だった。

恐らくそれがこのアンノウンの血なのだろう。

だが、アンノウンはその程度の攻撃では倒れない。

ブレードを広げ少年を切り裂こうと腕を振るった。

顔面近くに振られたブレードをサマーソルトキックで躲し、その最中に銃弾を撃ち込んだ。

先程と同じ場所に再度銃弾を撃ち込まれアンノウンの表情が苦痛に歪む。

少年はその隙を見逃さなかった。

すかさず靴底を利用した回し蹴りをそのから空きの胴体にお見舞いして見せた。

アンノウンは吹き飛ばされコンクリートの壁に打ち付けられる。

「消え失せろ」

アンノウンが最後に見たのは恐らく、少年の撃ち出した無数の弾丸の嵐だろう。

それを浴び、アンノウンは跡形もなく碎け散った。

一体目を片付けた矢先、最初に吹き飛ばされたアンノウンが少年に向けて斬りかかった。

その攻撃を少年は銃で受け止める。

恐ろしく強度のある銃だ。

コンクリートを豆腐のように両断するブレードを受け止めて見せ

ただ。

左右から繰り出される一撃死の攻撃を、銃を使い巧みにいなしていく。

その際に腕、胴体、足、と様々な部分を銃弾で撃ち抜き、銃身を使った殴打も加えていく。

いわゆる、ガン・カタと言われる戦闘スタイルである。

少年の攻撃の度にアンノウンから黒い液体が飛び散る。

その事態にアンノウンは少年を仕留めるために大きくブレードを振るった。

しかし、それは虚しく宙を斬り、アンノウンの頭上から大量の銃弾の雨が降り注いだ。

少年は攻撃を跳躍でかわすと同時に、アンノウンの真上に移動したのだ。

空中での逆さまの状態からの攻撃に対してアンノウンは、なす術もなく地面に縫い付けられるように這い蹲った。

少年が着地すると同時にアンノウンは白い粉となり、その場から消え去った。

その光景に一同が唖然とする中、少年は服に着いた埃を払いながら、何事もなかったかのように三人に向き直る。

それは異様な光景だった。

シャドウの精鋭とも言える自分たちが動揺していたとはいえ、苦戦した相手をこの目の前の少年は、難なく撃破して見せた。

三人の間に緊迫した空気が流れる。

「お前、一体何者なんだよ」

「緑川、恭哉」

月島が鋭い眼光で睨むが、少年——緑川恭哉は特に意に反した様子もなく、平然と名乗った。

それだけ言うともう用は済んだとばかりに踵を返す。

「待て」

「綾乃、何してるの!？」

背を向けてその場から立ち去ろうとしている恭哉は、綾乃に銃を突き付けられ、背を向けたまま静止した。

「お前、何が目的だ？」

「撃ちたければ撃てばいいさ」

しかし、恭哉は他人事のように答え、再び歩き出した。

「質問に答えろ！」

苛立たしげに叫ぶ綾乃に対して、恭哉は結局振り返ることなくその場を後にした。

三人は、学園が派遣した医療班が来るまでそのまま呆然と立ち尽くしていた。

緑川恭哉は真っ暗な闇の中にいた。

正確には、視界を何者かによって遮られた状態で。

不意に体を刺す様な痛みが走る。

それはやがて全身に広がり、手足の自由を奪って行く。

直後、体を焼くような痛みが変わった。

耐えようにもどうにもならない痛みが彼を襲う。

もがくこともできずに恭哉は意識を手放した。

目が覚めるとそこは見慣れた自室だった。

恭哉は自らの手をじっと見つめる。

握っては開く、そんな行動を二、三度繰り返す。

——動く。

動かないのではないかと思つての行動だったが、やがてそれが夢の内容だったと気付いた。

夢の中では痛みを感じないと言うのは妄言に過ぎない。

いくら夢とは言え、痛いものは痛いし、気持ちがいいものは気持ちがいい。

痛くないと思えるのは、それが夢だと気付いた瞬間からだ。

額や腕、体中のあちこちがべつとりと纏わりつくような汗で濡れていた。

相当魘されていたのだろう。

やけにリアルな夢だったが、それは当然の話だ。

何故なら、それは現実にあったことなのだから。

ふと時計を見やる、時刻は深夜二時過ぎ、起きるには早すぎる時間だった。

「……………」

恭哉は溜息を吐いた。

完全に目が覚めてしまった。

冷蔵庫に入れておいたミネラルウォーターを取り出しベランダへと出た。

春を迎えたばかりの夜風は、とても冷たく、汗で濡れた体には大分堪える。

恭哉は柵に寄り掛かるようにして、未だに灯りに消えぬ街を見渡す。

高層マンションと銘打ってあるだけあってか、見渡しは良かった。空を見上げれば満天の星空が輝きを放っていた。

視界を戻せば人工の光が地上を支配している。

ミネラルウォーターを一口飲み、その景色をぼうつと眺める。変わらない世界だ。

きつと人はこうして明日も、それ以降の未来も同じように生きるのだろう。

ただ、変わらないと言うのは間違いだ。

人は日々変わっていくものだ、自分自身ですら気づかないうちに、今こうして見上げている星がいずれ死ぬように、人もいずれ死ぬ、永遠などありはしない、どんなに頑丈な物でも、形があるものはいずれ壊れてしまう。

どんなに大事に、大切にしていようと、壊れる日が来てしまう、死ぬ日が来てしまう。

それが分かっていながら人は尚も働く、多くの人々が寝静まっているこの時間帯でさえも、寝る間を惜しんで働いている。

もっともそれが、世の為になるのか、それとも個人の私欲に化けるのかなど、この時の恭哉の勝手知ったる内容ではないのだが。

月島は学園内に設置してある自販機で購入した缶コーヒーを飲みながら教室の机にぐったりと平伏していた。

あの後、綾乃たち共々病院に行った結果、綾乃は軽いかすり傷程度で月島は、全身打撲程度という事で自宅療養となった。

担当の医師曰く、話を聞く限りでは骨が砕けていてもおかしくない、と驚かれた程だ。

「（案外頑丈なんだな、俺って）」

月島は、缶コーヒーを啜りながらしみじみと思った。

「つつきー、本当に大丈夫なの？」

聞き慣れた声に月島は、ゆっくりと上体を起こした。

「おう、特に異常なしだって言っただろ。結構頑丈なんだよ、俺って」
ダラダラと缶コーヒーを啜りながら月島は唯に微笑みかけた。

「そっか。でも、体が丈夫なのは良い事だけど、あんまり無茶しちや駄目だよ」

「ああ、そうだな。俺もまだ死にたくないし」

「そうだよ、つつきーが死んだら悲しむ人がいる事忘れないでね」
伏せ目気味に言う唯がなんだかとても幼く見えた月島は、思わずその頭をぼんぼんと軽く撫でた。

「わっ、な、なにすんのつつきー！」

「心配してくれてありがとな」

月島は心配してくれた唯に対して、心からの感謝の気持ちを伝えた。

すると唯はみるみる顔を朱くさせて俯いた。

そんな様子が可愛らしくて月島はつい笑ってしまう。

月島の笑い声が聞こえたのか唯は顔を上げ、軽く睨みつけた。

「わ、笑うなヘタレ！」

それだけ言うと、唯は綺麗に結ばれたツインテールの髪を揺らし、てそそくさと教室を出て行ってしまった。

「ヘタレ……か」

今の態度は幼馴染として何度も経験しているからわかる、単なる照れ隠しに悪態をついているだけなのだ。

本調子ならもっと心に刺さる言葉がああ可愛い少女から吐かれる。

そう、仲村唯は、その見た目に反して毒舌家であり悪戯好きな性格なのだ。

「（まあ逆に、素直な唯つてのもなんかしっくりこないし、あれがなんだかんだで一番なんだよな）」

しかし、月島も唯に言われてばかりではない。

時には、それこそ厳しい仕返しをしたりもする。

そのことで彼女が悲しそうな表情をすれば途端に自分も悲しくなってしまう。

唯にはいつでも笑っていてほしい、月島はいつしかそう思うようになっていた。

そうしてじゃれ合いのようなやり取りを繰り返していく、迷惑そうに言う月島、それに対して食って掛かる唯。

小学校から続く唯とのやりとりに月島は完全に慣れてしまっていた。

もはや言い合いは当たり前前の習慣と化している。

それにしても慣れとは恐ろしいな、と思いつつ缶コーヒーを一気に飲み干した。

「おはよう、月島」

「おう、おはよう」

「唯が何か言いながら廊下を走って行ったが、月島、お前何かしたのか？」

朝からにつこりと柔らかな笑みを浮かべて挨拶をしてきた葵に対して、綾乃はいつもの仏頂面を浮かべ唯について尋ねてきた。

「まあ、色々とな……」

苦笑しつつ述べた。

その回答に対して綾乃は、特に聞き返そうとはせずに話題を変えた。

「それで、例の緑川恭哉についてだが、上は仲間に取り入れるつもりらしい」

その話題に入った途端三人の表情が強張る。

「確かに、あれだけの強さだ。ランクで言えばお前らと変わらないかそれ以上だろう」

「でも今どこにいるかなんて分かんないよ？」

月島の言葉を継ぐように葵が言う。

確かにその通りだ、あの神出鬼没の少年が次にどこに現れるかなど分かる筈がない。

「アンノウンが現れた場所に向かえば自ずと会えると思うんだが」

「……確かに、その可能性は高いな」

綾乃の言葉に月島と葵は顔を見合った。

「まあ、なんにしても緑川とは一度話をしてみたいからな」

もし緑川恭哉が自分達に協力してくれれば、問題の早期解決に繋がるのではないのか？と。

次に会う事があったらまずは、仲間になってくれなしかと頼む事から始めよう、そう決意した。

朝のSHRを迎え、担任である小沢萌香が教室に入ってきた。

そして、開口一番にこう告げた。

「今日は編入生を紹介します」

教室に萌香の元気な声色が響く。

予想外の展開に教室内は一気に騒がしくなった。

萌香は、ドアをスライドさせて来訪者を招き入れた。

来訪者の容姿にそれまでざわついていた生徒たちが全員黙った。

虚を突かれた月島は、驚愕で開いた口がふさがらなかった。

教壇の隣に到達したその人物は、落ち着いた声色で名乗った。

「緑川恭哉だ、事情により入学式に間に合わなかったため、このような形で入学させてもらった」

月島は、強烈なフラッシュバックに襲われた。

ある時は廃墟で出会い、またある時は自分たちが苦戦したアンノウンをいとも簡単に倒した少年の名は——緑川恭哉。

月島は思わず息を呑んだ。

クラス中のあちこちから耳を塞ぎなくなるほどの大音量の女子の黄色い声援が聞こえるが、月島はそれが聞こえない程に緊張していた。

正確には感覚が麻痺しているようにも思えた。

「えーっと、それじゃあ緑川くんは、一番後ろの空いている席に座ってくださいね」

萌香は、一通り全員の自己紹介が終えたため、恭哉に席を指定した。

その席は、他でもない月島の隣だった。

その事に月島ははつと我に返った。

「よ、よう。久しぶりだな」

先程の感覚がまだ残っている月島は、引き攣った笑みを浮かべながら声をかけた。

「そうだな」

恭哉は、極めて冷静に答えた。

「なあ、話があるんだがこの後いいか？」

「奇遇だな、俺も丁度聞きたいことがある。シャドウと言う組織――

――

「待ってくれ、その話はここでしないでくれ。場所を変えよう」

恭哉の質問に月島は大慌てで遮った。

クラスメンバーには聞かれたくない話だ。

「そうか」

熱意が伝わったらしく、恭哉は一旦視線を前に戻した。

萌香の号令でSHRの終了が告げられた。

月島は、恭哉を連れて屋上へと向かった。

暦の上では春になったとはいえ屋上に吹く風は、まだまだ冬の寒さを残していた。

「そうか、あのことは秘密にしているのか」

「ああ、少し訳ありだな」

月島はバツが悪そうに顔を伏せた。

「それよりお前は一体何者なんだ？」

「その前にまず、お前の所属しているシャドウとやらについて知っている事をすべて話せ。話はそれからだ」

一拍ほどおいてから月島は喋り出した。

「……詳しくは言えない。……でも信用してくれ、俺達は皆を守る為に戦ってる」

「それは正確じゃないな。言えないんじゃないかって、お前もよく知らないんじゃないのか？」

恭哉の鋭い言葉に月島は思わず喉を詰まらせた。

「……………」

「そして少なくとも、俺はよく分からない物を信用したりはしない」何も言えずにその場に硬直している月島に対して、恭哉は続けて言った。

月島は齒噛みしかできなかった。

確かに恭哉の言う通り、よく分からない物を易々と信用する人などいるはずがないだろう。

自分の考えが甘かった。

月島はそう痛感した。

暫くじつと月島の表情を窺っていた恭哉は、興味を無くしたようにその場を後にしようと踵を返した。

その姿を見た途端、月島の中で一つの感情が爆発した。

「とにかく、俺たちの仲間になって一緒にアンノウンと戦ってくれ。頼む、この通りだ」

背を向けたままの恭哉に向かって月島は頭を下げた。

この言葉だけは、言っておきたかったのだ。

先程の会話から察するに、恭哉が承諾する確率は無いに等しいだろうが、それでも諦めたくなかった。

進化したアンノウンに対して同等以上の戦闘を繰り広げられる恭哉なら、この問題の早期解決に繋がると月島はどこかでそう確信していた。

恭哉からの返事がない。

やはり無理だったのだろう、と月島が考えていると、一つの返答が返ってきた。

「……分かった」

「本当か!？」

下げた頭を上げ、その先にいる恭哉を見詰める。

「ただし、条件がある」

「条件？」

思わずその言葉を反復してしまった。

「お前達の命令は聞くつもりはない」

それだけ言つと恭哉は、すぐにその場から去つてしまった。

月島は思わず戸惑いの表情を浮かべてしまい、引き止める言葉も出なかった。

恭哉の目的もアンノウンの討伐であることには間違いない筈だ、それなのに何故同じ志を持った者同士の協力を嫌うのだろうか。

確かにあつたばかりでお互いのことをまったく知らないが、それでも月島は恭哉に一つの芯が通っているということだけはなんとなく理解していた。

初めて出会つた時も、あの時も、結局は自分達を傷つけることなく、相手の注意を逸らして戦つていた。

『自分を犠牲にしても他人を守る。戦士には向かない性格だな』
そんなことを口にしながら、自分でも他人を守る為にアンノウンの前に立ちはだかつていたと言うのに、月島は何故か恭哉にある種の親近感を覚えた。

冷たいようで、実は優しい奴なのかもしれない。

月島の中で勝手な恭哉像が膨らんだ。

「……いや、それはどうなんだろうな」

天を仰ぎながら自分の考えに突っ込みを入れた。

真つ青に晴れ渡つた空のどこにも答えは浮かんでいなかった。

階段をゆつくりと下りながら恭哉は思考を巡らせていた。

月島の想いは十分に伝わってきた。

廃墟で出会つた時や、建設途中のビルで出会つた時もそうだった

が、月島秀樹と言う男は他人を放っておけない人物なのだろう。

例えそれが見ず知らずの人間であっても。

月島は恭哉にとっては新鮮な存在だったのと同時に、興味が湧いた。

月島の、誰かの為に自分を犠牲にしても守ろうとする精神に対して。

本当のところ提示した条件などに意味はなかった。

元々はどこかの組織に所属し、情報だけもらい勝手に行動するつもりだったのだ。

それが月島と言うパイプを通して自分に仲間になれと言ってきたのだから、後はそこに所属するだけだ。

月島の釈然としない説明では深くまでは分からなかったが、どの道、組織に入っても入らなくても自分は狙われるということだけは分かった。

何故なら、自分は新型のアンノウンを軽く倒してしまったのだから。

これからますます忙しくなりそうだ。

恭哉は、萌香が黒板に板書した内容をノートに書き込んでいた。

内容は、能力者が扱う能力についての基礎知識。

授業内容から考えて、全員が能力を身に着けている可能性が高かった。

授業のカリキュラムに能力の使用方法などが組み込まれているのには驚きだ。

この学園は軍人でも養成しようとしているのだろうか。

周りを見渡せば、皆熱心に黒板とノートを交互に見ては書き写していた。

探れば探るほど謎の多い学園だ。

編入前にニュースや新聞を隈なく見たが、どこにもアンノウンに

ついでの情報載っていなかった。

もちろん死傷者の報道もない。

あれだけの事件をマスコミに嗅ぎ付けられることなく、抑えてしまふということは、この学園は相当な組織力を持っている事が窺えた。

確かに学園に通学する者の大半は、一般とはかけ離れた存在ではあるが、所詮は一介の高校生に過ぎない筈だ。

しかし、その活動範囲は大人顔負けで、ごく一部の人々は街の治安維持すらしている。

とは言え恭哉のもっぱらの興味の対象は、この瞬間ですら窓側から睨みを利かせている少女に注がれていた。

「それでは今日はここまでです。次の時間は第一アリーナに着替えて集合です、皆さん遅れないでくださいね」

萌香の号令と同時に終了を告げる鐘が鳴った。

次の時間は能力を用いない模擬戦闘だと告げられた。

「緑川恭哉、次の授業で私と手合わせしろ、いいな」

早速と言った様子で目の前に現れた少女は、敵意を漲らせた目を恭哉に向けてそう宣言した。

「綾乃、ストップ」

「どの程度の強さか知りたいだけだ、構わないだろう？」

「緑川は命の恩人でもあるんだよ？」

その少女の後ろから慌ててもう一人の少女が止めに入ってきた。

「好きにしろ」

「言ったな？」

ニヤリと笑みを浮かべる少女は、得物を見つけた猫のように笑う。ただ残念ながら、その得物を捕えることは敵わないだろうが。

「ちよつと、綾乃」

「助けられたことには感謝しているが、それとこれとは別問題だ」
承諾した恭哉を無視して尚も二人は言い合いを続ける、ただその姿は妙に微笑ましかった。

そんな二人を恭哉は眩しいものを見るように眺めていた。

「あなたが噂のみどりん？」

何処か弾んだ声のする少女が目の前に立っていた。

活発そうな見慣れぬツインテールの少女だ。

「唯、お前なにやってんだ」

「ヘタレのつつきーじゃんか」

「誰がヘタレだ。馬鹿唯」

唯と呼ばれる少女と月島の漫才のようなやりとりはしばらく続いた。

この少女の名前は、仲村唯と言うらしく、その印象通り活発な少女だが、それと同時に毒舌家でもありそうだった。

恭哉は、そんなやりとりを繰り広げる彼等を遠目に眺めた。

この学園にいる人々はみな一様に輝いている。

自分が過ごした場所との差を感じ、やはりこの二人にも眩しさを感じた。

「くれぐれも能力の使用は厳禁ですからね」

フリーエナチャンセラ

萌香が審判を務め、しっかりとFECが付いている事を確認し、ち、恭哉と綾乃の模擬戦が始まった。

武器はお互い、銃弾をペイント弾に変更された特殊拳銃が二丁。

編入初日の恭哉と、既にランクAとして有名になっている綾乃の模擬戦は、誰が見ても少女の圧勝だと思われた。

試合開始の合図を受けた綾乃は恭哉に向けて勢いよく飛び出した。

両手の銃を交互に撃ち距離を詰めていく。

しかし、恭哉はそれをひらりと動いて躲けて見せた。

綾乃は特に驚いた様子も見せずに、移動しながら銃弾を見舞ってくる。

しかし、撃ち出された弾丸の軌道線上に既に恭哉の影はなかった。確かに綾乃の狙いは正確だ、相手が次に動くであろうポイントに

正確に打ち込んでくる、しかし銃弾は所詮銃弾。

直線にしか飛ぶことは出来ない。その為、照準が定まるより早くその場を移動する恭哉に、弾を当てるのは至難の業だ。

不意に動きを止めた恭哉に綾乃は素早く照準を合わせ、先程と同じ様に放った。

恭哉は避けようともせず冷静に同じく手にした二丁の銃で撃ち落とした。

過去にアンノウンの手裏剣を撃ち落としたのと同じことだ。

その攻防に一同が唖然としていた。

銃弾を銃弾で撃ち落とすなんて芸当など初めて見た人の方が多いだろう。

そもそも、そんなことを出来る人がいるとは思ってはいない。躲しては撃ち落とす。

それを繰り返す恭哉に対して綾乃は、距離を詰めてインファイトに持ち込むつもりらしい。

「この距離なら躲せないだろう？」

銃を構えた綾乃が不敵に笑う。

お互いに銃口を相手に向けたまま睨み合う。

恭哉と綾乃の距離は一m程だ。

綾乃はこの距離なら一発や二発は当たるだろうと考えているのだろう。

しかし、その考えは甘い。

——本当にそうなのだろうか？

恭哉の中で一つの疑問が生まれた。

あの時の戦闘を思い出せば、綾乃の本来の動きはこんな程度ではない。

模擬戦のルールで能力の使用は禁止されているが、綾乃の能力は身体能力を極端にあげる物ではない。

寧ろ、自分の技術で戦う方に適している。

だとすればこの状況は一体何なのだろうか。

——意図的に手を抜いているのか？

恭哉は綾乃の真意を測りかねていた。

自分に向けて構えられた銃口を素早く銃身で弾き、受け流しながら恭哉はさらに考え続けた。

「チツ！」

綾乃の舌打ちが聞こえる、恐らく苛立っているのだろう。

苛立ちは時として判断を鈍らせることもある。

「（仕方がない、決着をつけるか……）」

綾乃のこの手抜きにも思える模擬戦を何故展開しているのかは分からない、だがこれ以上続けることに恭哉は意味を見いだせなかった。

「甘い」

呟くと同時に恭哉の体が左右にぶれた。

それまで正確な射撃を繰り返してきた綾乃は、その事態に一瞬引き金を引くのが遅れてしまった。

「ッ……！」

途端に武器を撃ち落とされた。

それでもまだ終わりではない、そう思った瞬間、綾乃の額に恭哉の銃が突き付けられていた。

「……………」

綾乃は膝をついて負けを認めた。

周りの生徒たちが愕然としている。

無理もないだろう、トップクラスの能力者が目の前で膝をついたのだから。

いくら模擬戦とはいえ、ここまで簡単にランクAが倒されるのを見せられてはそうするしかないのだろう。

しかし、その中に冷笑が混じっているのに恭哉は気がついた。

最初から手抜きの様な戦闘だったのは頂けないが、それでも彼女は強い。

正直に言って不愉快だ。

その方向を恭哉は軽く睨んだ。

途端にその冷笑は消えた。

恭哉のその視線は、直視すれば卒倒ものの凄みを含んでいた。

「えゝ、すばらしい模擬戦でした、皆さん二人に拍手を」

萌香もあまりの事に咂然としていたのだろうが、そこは教師としての立場を忘れてはいなかったのか、取り繕うように咳払いをしてから、当たり障りのない言葉を述べた。

その声が、アリーナに響くと同時にクラス中からの拍手が轟いた。

「（後で白崎綾乃に真意を聞く必要があるな……）」

しかし、恭哉にとっては嬉しくない勝利だった。

その日の放課後、寮のフロント部分で何やら騒いでいる一団を見つけた恭哉は、興味をそそられ、行ってみることにした。

「緑川くん、編入おめでと〜！」

扉を開くと一斉にクラッカーが鳴らされた。

あの一団は、恭哉の編入を祝ったパーティーを催すために集まったクラスのメンバー達だったのだ。

編入したその日に開かれたパーティーとだけあつて質素さが目立つが、学生なのだから当たり前とも言えた。

主賓である恭哉の到着を皮切りに次々と飲み物の栓が開けられ、瞬く間にどんちゃん騒ぎとなった。

大皿に盛りつけられている料理はどうやら学生食堂で作られたものらしく、みな一様においしそうに食べていた。

「主賓が部屋の片隅にいるのは感心しないな」

料理と飲み物を受け取り少し離れた場所に腰を下ろしその光景を眺めていた恭哉に、むすつとした表情をしながら綾乃がやってきた。綾乃は片手に料理を乗せた小皿を持ちもう片方の手で飲み物を手にしていた。

「そう言うお前は混ざらなくていいのか？」

「私はああいうのが苦手なんだ」

恭哉の座るテーブルの反対側に座った綾乃は、軽く溜息を吐いた。その表情から察するに本当に苦手なのだろう。

「そうか」

沈黙が二人の間に流れる。

お互いそれほど多弁な方ではないため必然的に会話が途切れる。

恭哉は手にした飲み物をゆっくりと飲みながら、騒いでいる一団を眺めた。

歓迎パーティーと銘打ってはいるが、結局はみんなで集まってこ
うして飲み食いがしたいだけにも思えてくる。

宴もたけなわと言うのがしっくりくるほどの盛り上がりを見せて
いる歓迎パーティーは、すでに男子達の残りの料理をかけた戦いが
始まっていた。

「二人ともこんなところにいたの？」

「私はこういうのは苦手なんだ」

葵の呆れたような声に綾乃がすかさず反論した。

「でも、なんで緑川がいるところに一緒にいるの？あ、もしかして
私お邪魔？」

葵はわざとらしい素振りで綾乃をからかった。

「なんなら。葵も一緒に座るか？」

しかし綾乃はからかわれたことに気づいていないのか、表情を変
えず葵を席へと誘った。

「あ、うん。じゃあそうさせてもらうね」

悪戯が失敗した葵は、毒気を抜かされた表情をしながら綾乃の隣
に座った。

葵が増えても共通した話題が見当たらない三人は、ただ黙ったま
まだった。

恭哉と綾乃にとっては苦にならない沈黙でも葵にとってはそうで
はないらしく、なにか言いたそうに一人百面相をしていた。

「葵、あそこ、月島が混ざってるぞ」

そんな葵を見かねたのか、綾乃は、ある方向を指差した。

「え？あ、本当だ」

その方向を見やれば、何やら勝ち誇った笑みを浮かべる月島と、呆れ顔の唯が視界に映った。

「よっしゃー！サバ味噌ゲツトオー！」

この位置まで聞こえる程の大声に、恭哉達三人は、小さく笑った。

賑わいを見せたパーティーも無事解散となり、恭哉は、自分用に割り当てられた私室へと戻った。

恭哉はすでに、自宅を持っではいるが、祠雪学園側が私室を用意するとのことで、今はこちらに住むことにしていた。

初日の授業をすべて乗り切った恭哉は、部屋に辿り着くと制服を脱ぎ、皺にならないようにハンガーに掛けた。

それにしても一介の学生に割り当てるには中々広い部屋だ。恐らく二人で生活しても何ら困らない広さだろう。

何か飲み物はないのか、と冷蔵庫を探してみても、中には何も入ってはいなかった。

仕方なく、持参した茶葉をポットに入れ、お気に入りの銘柄の紅茶を淹れた。

適度に調節した温度のお湯の中を茶葉が舞う。

お湯が飴色に変わったタイミングで陶磁器製のティーカップにその液体を注ぐ。

特に尖った風味もなくミルクとよく合う紅茶——アッサムティーの完成だ。

実際にはミルクを入れた方がよりアッサムの魅力が引き出されるのだが、恭哉にとってはこのままでも十分なのだ。

砂糖などの香味料を用いず素材そのままを味わう、要はブラックのままが恭哉の好みなのだ。

丁度一服したところで、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「鍵は開いている」

告げると同時にドアが開いた。

「お邪魔する」

現れたのは、白崎綾乃。

模擬戦の時のように睨んではいなかったが、それでも彼女の纏う
雰囲気はどこか冷たかった。

そこにはある種の人を寄せ付けないオーラが含まれている。
もしかしたら彼女と自分は似ているのかもしれない。

恭哉はふとそう思った。

「お前、あの時あいつらを黙らせただろう」

綾乃の言うあの時とは、恐らく模擬戦の後、冷笑していた連中を
黙らせたことを指しているのだろう。

「それがどうかしたのか？」

「お前、面白い奴だな」

「そんな事を言いにはわざわざやってきたのか？」

「ふん、勘違いするな。暇だから寄ってやっただけだ」

綾乃は、心外だな、とでも言いたげな表情を浮かべた。

「そうか」

恭哉はそう呟くと、台所へと姿を消した。

それにしても暇だからと言う理由だけで、正反対の位置に存在す
る男子寮まで足を運ぶものだろうか、その矛盾に恭哉は小さく笑っ
た。

それまで恭哉のいたスペースがぼっかりと空き、室内がさらに静
まった気がした。

しかし、綾乃はこの空間に妙な居心地の良さを感じていた。

「飲むか？」

目の前にクリーム色の液体が入ったティーカップが差し出された。

「……これは？」

「ミルクティーだ」

「甘い香りがするな」

恭哉が差し出したカップからは、微かに、甘い香りがした。

「……おいしいな」

差し出された紅茶を一口飲み、綾乃は予想外のおいしさに驚いた。何より、優しい味だった。

「砂糖少なめ、ミルク多めだからな」

そう言う恭哉自身はなにも入れないらしく、綺麗な飴色の紅茶をカップへと注いだ。

綾乃も本来は恭哉と同じなにも入れない方が好きなのだが、この微かな甘みは、嫌いにはなれない味だった。

「さっきのは撤回だ。お前は変な奴だな」
不思議な男だ。

綾乃は、そう思わずにはいられなかった。

「そうか」

恭哉は短く答えて紅茶を口に運んだ。

その仕草が妙にキザっぽかったが、不思議と似合っていた。

パーティーの時よりもいくらかは軟化した空気が二人を包んでいた。
た。

「……あの模擬戦、お前手を抜いていただろう」

やや間を持つて、恭哉は綾乃に尋ねた。

「……バレていたか」

「当たり前だ、お前から申し込んできた割には随分と適当なんだな」

「あの模擬戦に意味はなかったさ。ただ、きつかけが欲しかった」

「きつかけ？」

やや顔を伏せてから、綾乃はゆっくりと顔を上げて、恭哉を真正面から見据えた。

「お前とゆつくり話がしたかった」

「ほう、それでパーティーの時は適当にお茶を濁したのか」

「ああ、できれば二人きりが良かったんだ」

だから綾乃は敢えて葵のからかいを無視したのだ。

「だが、だからと言って俺の部屋にまで押しかけてくる必要はないだろう」

「いいじゃないか、減るものじゃない」

道理が通っているようでまったく通っていない。

「そう言う問題じゃないんだが」

「緑川、お前は本当に変な奴だな」

「俺にはお前の方が変に見えるが？」

「——違ういな」

何が面白いのか綾乃は短く笑った。

恭哉はちらりと時計を見やり、既に時間が九時を回っていることに気が付いた。

そろそろ寮の施錠が始まる頃だろう。

「それを飲み終えたら、今日はもう帰れ」

「……そうだな」

目配せしながら言うと、綾乃もそれが伝わったらしく、一瞬つまらなそうな表情を作ってからすぐに元の表情に戻した。

「見送りは必要か？」

「私を心配してくれるのか？」

その言葉に、綾乃は意味深な笑みを浮かべ振り返った。

「じゃあな緑川、また明日だ」

そう、明日もこうして話せばいいのだ。

時間は、まだまだたくさんある。

数十分間だけの対話だったが、綾乃は恭哉と言う男に更なる興味を抱いた。

【STAGE 01】（後書き）

誤字脱字などは気を付けて書きますが、おかしい部分があればご指摘ください。

【STAGE 02】（前書き）

随分と期間が空いてしまいましたが、第三話目です。
何かおかしな点がありましたらどうぞご指摘ください。

【STAGE 02】

翌朝、恭哉は朝食を摂りに食堂を訪れた。

券売機にお金を入れて日替わり焼き魚定食を購入した。

食券機から吐き出された券を持ち、他生徒の注文を受け忙しなく動き回っている従業員に声をかけた。

味噌汁と沢庵、そして少し炙られた海苔と共に丁度いい焼き加減の鮭が乗った盆が渡された。

空いている席を見つけそこに座り、恭哉は一人定食を食べ始めた。因みにご飯と味噌汁はわかり自由だ。

「（悪くはないな）」

味噌汁を一口飲み、そう評価した。

その調子で恭哉は他の料理にも評価をつけていった。

結果は平均的な味。

もちろんおいしい料理には変わりはないが、恭哉の視点から見れば平均的な味だった。

誰かに言うわけではないが、こうして料理を食べた時は必ず評価をつけてしまう。

「隣、いいか？」

「……ああ、構わない」

聞き覚えのある澄ました声に、恭哉は興味もなさそうに答えた。

誰かなど声を聞けば分かってしまう。その強気な性格を表すかのような言葉使いは、綾乃以外いないのだから。

「む、私と同じものを食べているのか……」

言いながらも綾乃は恭哉の隣へと座った。

「ごめんね、緑川」

綾乃に続くようにして一言断りを言って、葵も座った。

「おはよう、みどりん」

「ああ」

唯の挨拶に恭哉は短く答え、ご飯を食べ始めた。

「……それで、俺はどこに座ればいいんだ？」

四人掛けの食堂のテーブルは、恭哉、綾乃、葵、唯、の四人で座られてしまい、月島は寂しく立っていた。

「ん、しょうがないからここに座っていいよ、つつきー」

そんな月島の姿を見かねた唯がある場所を指した。

「おう、ありがとうって床じゃねえか！」

唯の言葉に月島がすかさずツツコミを入れた。

「月島秀樹」

「な、なんだよ、緑川」

話に突然入って来た恭哉に、動揺しながらも月島は尋ねた。

「早く座れ、飯が冷めてしまっっては作った人に対して失礼だ」

恭哉は静かに、抑揚のない声でそう告げた。

「お、おう」

月島が着席したのを確認すると、再びご飯を口へと運んだ。

「そう言えばさ、みどりの能力適性ランクってどれくらいなの？」

「ああ、それ俺も聞きたい」

唯の何気ない質問に一同が恭哉に視線を向けた。

「さあな」

恭哉は、素っ気なくそう答えた。

「それにしても、緑川って案外話せる人なんだな」

「月島、お前は恭哉をなんだと思ってるんだ？」

「いや、最初に出会った時とイメージが違ってさ」

「そうかな、わたしはあんまり変わらないけど」

月島の発言に対して葵は、素直に意見を述べた。

大方喫茶店でのことを思い出したのだろう。

「……………」

恭哉は自分を囲みわいわい騒いでいる彼女たちを、物珍しそうに見渡してから、最後の一口を口に運んだ。

一人以上でご飯を食べる。そんな団欒とした食事は彼にとって初

めてだった。

朝食を摂り終え、教室に向かう恭哉たち一行を大量の生徒たちが取り囲んだ。

その異様な光景に何かあるのかと一瞬身構える恭哉だったが、どうやらそれは杞憂のようだった。

よくみればそこに集まった生徒たちの視線に敵意はなく、寧ろ尊敬の念さえ浮かんでいた。

「ねえねえ、緑川くんって能力適性ランクSって噂本当なの？」

耐えかねたのか女子生徒の一人が恭哉に質問をした。

「待っていればその内正式な発表があるだろう」

恭哉は、静かにそう告げ、教室の扉を開け中へと入って行った。

そんな素っ気ない恭哉の反応に、「キヤー！！緑川くんって噂通りクール！！」と盛り上がる女生徒が多発した。

「……美形って本当に得する生き物だな……」

後を付いて来た月島がぼそりと呟いた言葉は、黄色い悲鳴によって虚しく掻き消された。

恭哉は、黄色い悲鳴を無視して教室に入ったものの、まだSHRを迎える時間までは三十分程余っていた。

特にすることも思いつかない恭哉は、席に着き静かに外の景色を眺めていた。

「暇そうだな、恭哉」

「またお前か」

それにしても、と恭哉は思う。

朝の朝食時もそうだったが、彼女は何故いきなり自分を下の名前で呼び始めたのだろうか。

綾乃があまりにナチュラルに言うものだから、恭哉も敢えて何も

言わなかったのだ。

まさか、昨日今日で彼女に何か大きな心境の変化があったわけではないだろう。

確かにあのメンバーの中では綾乃との距離感が一番近い気がするが、かといってそれ程お互いを信頼しているわけでもない筈だ。

恭哉は、ポーカーフエイスをまったく崩さずそんなことを考えていると、綾乃は続けて口を開いた。

「せっかくだ、恭哉。お前も私のことは綾乃と呼べ」

「唐突だな」

恭哉の言葉に綾乃はニヤリと不敵に微笑んだ。

「何しろ私もお前のことはよくは知らないからな。お互いを知る為に少しは呼び名を変えてもいいじゃないか。唯だってもうお前を？みどりん？と呼んでいるしな」

「ほう、それでお前も便乗するのか？」

随分と強引な解釈だ。

「いいじゃないか、減るもんじゃない」

「……気が向いたら呼んでやる」

意地悪そうに笑う綾乃に恭哉は、苦笑しながら返答した。

SHRまでの余った時間を潰すために、月島はいつものように唯たちの話の輪に加わっていた。

唯の言葉に葵が頷き、綾乃が何か言う。

そして時たま自分に話題が振られ、答える。

そんな会話が始まるものと月島は思っていた。

しかし、ふと気づいてみれば綾乃の姿が見当たらなかった。

唯や葵も気が付いたらしく、辺りを見渡すと、綾乃は恭哉と何や

ら話をしていた。

「あれ？あやのんが、みどりんのところにいる……」

「綾乃と緑川ってそんなに仲よかったのかな……？」

唯と葵の困惑は月島にも伝わった。

綾乃の性格上、自ら誰かと関わろうとするようなことはあまりない。

もし関わるとしても、敵対した相手や、都合上どうしようもない場合のみに限られる。

月島も、組織がたまたま同じでなければきっと口も聞いてもらえないだろう。

実際の彼女はもう少し融通が利くが、彼の中の綾乃のイメージとは大体こんな感じだった。

「でもあの二人ってなんだか絵になるね」

「そうだね、どっちもクールだし、二人とも美形だしね」

微笑ましそうな笑みを浮かべて言う葵に唯も同意して言った。

「まあ、確かにある意味お似合いかも知れないな」

そんな二人に同調するように月島もそう呟いた。

「なあ、緑川。さっき白崎と何話してたんだ？」

唯たちとの談笑を終えたらしい月島が、席に戻って来た。

「気になるのか？」

「いや、珍しい光景だったからさ」

「ほう、そんなに珍しいか」

目を細めて言う恭哉に、月島はしどろもどろになりながら答えた。

「なあ――」

「SHRを始めますので、みなさん席に着いてくださーい」

月島が何か言いかけたのと同時に、担任の萌香が教室に入ってきて、その言葉の続きを聞くことは出来なかった。

「それから、緑川くんはSHRが終わったら、私に付いてきてくださいね」

SHRを終え、萌香に言われた通り彼女の隣に付き、歩いていた。行き着いた場所は職員室。

萌香と共に入室した恭哉は、ある人物の前まで案内された。

「はい、これ君のランクS証明書、おめでとう」

その人物はどうやら教頭らしく、証明書と大量に書類を渡された。恭哉の編入時のごたごたで渡すべき書類や、証明書などが滞っていたのだ。

渡された書類を片手で持ち、恭哉は一礼して萌香と共に職員室から退出した。

「ごめんなさいね、本当はもっと早くに渡しておくべきでしたね」

萌香は本当に申し訳なさそうに言った。

「いえ、お気になさらないでください」

必要最低限の言葉をかけ、恭哉は、教室へと向かった。

「……やべえ、全然わかんねえ」

月島は、机の上に開いてあるノートに額をくつつけるようにして突っ伏した。

祠雪学園は、能力の説明、実戦、以外にも一般教養として普通の高校生が行う学習もカリキュラムに含まれている。

当然その教科ごとに担当の教師も変わる。

月島は、目の前の黒板に書かれた公式と、教材を交互に見比べ、再度机に突っ伏した。

そう、月島秀樹は勉強面が壊滅的に悪かった。それでもなんとか問題を解こうと努力してみるが、さっぱり解らない。

「緑川、お前これ出来てるのか？」

隣で頼杖をついてつまらなそうにしている恭哉に、月島は質問を投げかけた。

その態度から月島は、恭哉も自分と同じく問題が解けずに難儀している、と思い。

親近感を勝手に覚えた。

しかし、恭哉からの返答は予想とは違った。

「当然だ。まさかお前は出来ないのか？」

「なん……だと!？」

月島は愕然とした。

恭哉のノートを見やれば、指定された範囲以上も既に終わっていたのだ。

「……どうせ俺なんか……」

諦めにも似た言葉を吐き出しながらも月島は、ペンを握った。公式を見ながら、問題を解いていく。

そして、解き終わったその時、隣でその様子を見ていた恭哉が、呟いた。

「おい、それ最初から見ている場所が違うぞ」

「え？」

「これはこっちの問題の公式だ。お前が使うべきはこっちだ」

このこと、これだ、と恭哉に指で示され、月島は力が抜けてゆくのを感じた。

再び机に突っ伏した状態から、月島はしばらく動くことが出来なかった。

昼時を迎え、授業終了と同時に男子生徒が一目散に教室を飛び出して行った。

何でも数量限定の絶品パンがあるらしく、それを狙ってのことらしい。

「ねえ、緑川、せっかくだから私たちと一緒に昼食べない？」

朝も一緒だったし、と柔らかな笑みでそう言われ、特に断る理由もない恭哉は、その提案を承諾した。

同年代の女子に比べ落ち着きがあり、素直な性格の葵は、尖ったところがなく、温和で人当たりもいいため人を和ませる才能があると感じた。

さらに加えて言えば彼女のような柔らかい雰囲気をもった人間は、恭哉にとって非常に好ましい部類に入る。

「ほら、つきー起きて、置いてくよ」

隣を見れば、席に突っ伏したまま動かない彼のつむじを唯がシャーペンの芯で突くと言う地味な起こし方をしていた。

「分かったから、分かったからやめろ、それ地味に痛い」

それまで糸の切れた人形のようなだった月島が痛みに耐えかね、起き上がった。

無事再起動を果たした月島は、唯にもう少し普通の起こし方はなかったのか、と言いながら席を立った。

口では色々と言ってはいるが、その表情に嫌悪感は見受けられなかった。

「どうした、恭哉。食堂に行かないのか？」

じっと観察するように月島たちを見る恭哉に、綾乃が声をかける。「……何でもないさ」

恭哉は誤魔化すように、視線を月島たちから外し、食堂へ向かつ

て歩き出した。

流石に昼時とあつて食堂は混雑していた。

何処を見ても座れる席は残つてはいなかった。

教室を出るのが少し遅かつたようだ。

「あの……緑川さんですよね？」

「ああ、そうだ」

名を呼ばれ、振り返れば見覚えのない女子生徒が何やら言いにくそうに、もじもじとしていた。

「あ、あの、宜しかつたらこの席、使ってください」

「お前達はどうするんだ？」

女子生徒の差したテーブルには、彼女の友人であろう女子生徒が昼食をとっていた。

「い、いいんです。もう、行きますから」

「まだ食べているように見えるが？」

「それより緑川さんに座っていただく方が先です」

そう言い残して、そそくさと数人の女生徒達が去つて行つてしまい、恭哉は仕方なく空いた席に座つた。

「見たぞ、恭哉。女を誑かして席を確保するとは、お前は女泣かせだな」

恭哉の隣にトレイを持って座りつつ、綾乃はにやにやとからかいの笑みを浮かべた。

「あいつらが勝手に席を譲つて行つただけだが？」

「多分緑川がランクS認定受けたつて聞いたからじゃないからかな」
葵は、そんな綾乃の隣に座り、説明を加えた。

「ほう、たかがそれだけでそこまで態度を変えられるモノなのか」
「ランクAの能力者はこの学校にもそれなりにいるんだけど、ランクSは中々会うことさえできないから、珍しいって言うのがあると思うよ」

葵の説明を受けてなお、恭哉には釈然としないものがあつた。

「まあ確かにランクS認定は珍しいし、何より一つの目標みたいなもんだしな」

「つつき」はB判定だけどね」

恭哉の反対側に座つた月島を唯がからかう。

「悪かつたな」

月島は、ふん、と鼻を鳴らし隣に座る唯を睨んだ。

確かに月島の言うように、最高位のランクを与えられることは素晴らしい事だろうし、なにより目標としては十分だろう。しかし、見るからに同年代だと言うのに敬語で話されるというのは、何か距離を感じてしまう。

正直、あまりいい気分ではなかった。

特別扱いされる事には慣れている、ただ自分はその能力を持て余している。

大抵は、自分の能力を恐れてのものだ。

常に自分に対する怯えや、恐怖が見え隠れしていた。

もしもの時の保身のためにおべっかを使ったり、胡麻を擂ったりするモノを何人も見てきた恭哉にとってそれは嫌悪感を抱かせるに十分だった。

ただ、そいつらとこの学園の人々の違いは、純粹さだった。

先程の女子生徒は、自分をそう言った目では見てはいなかった、確かに時折言いつらそうに、もじもじとしてはいたが、それは初対面という点も含めれば普通だろう。

「まあとにかく、とりあえず席に座れてよかったぜ」

「さっきの女の子たちには悪い気がするけどね」

先程に比べれば大分空いてきたが、それでも今のようには座れないだろう。

多少強引ではあつたが、席を譲られ、恭哉たちは得をしたと言うことになる。しかし、恭哉はそれでも腑に落ちない様子で掛け蕎麦の汁を一口飲んだ。

汁は、雑節をベースに作ったらしく、醤油やみりんといった調味料に負ける事無くその存在感を主張していた。

蕎麦も少し硬めで、恭哉好みの湯で加減となっていて中々おいしいと思えた。

「……蕎麦がメインか」

恭哉の中で、当面の食事は蕎麦にしようと思ったかどうかは、定かではない。

放課後を迎え、恭哉は校内を少し散策してみる事にした。

それなりに名の通った学園であるため、学内設備の水準も中々の物だった。

日が沈むのを恭哉はベンチ腰掛けぼんやりと眺めていた。

辺りには部活動に勤しむ生徒たちの声が響いていた。

ゆつくりと立ち上がり、恭哉は私室へと向けて歩き出した。

恭哉の割り当てられた私室は、ここから歩いて数十分の場所にあるため、それほど困る事はなかった。

私室に戻った恭哉はお湯を沸かしつつ、今夜飲む紅茶を選んでいった。

しばらく考えた後、手に取ったのは、セイロンのオレンジペコをベースとしたまろやかな口当たりと、ふんわりとした香りがするアールグレイ。恭哉はこの優しい味に惹かれ

購入した。

綺麗な飴色をしたアールグレイをティーカップに注ぎ、恭哉は満足そうに一口飲む。

くせのない独特のまろみを持った味わいが口内へと広がった。

備え付けのテーブルにソーサーに乗せたティーカップを置き、恭哉は書籍を取り出した。それは彼が書店で偶然見つけ、興味をそそ

られ購入したミステリーものの第一巻だった。

完全に日も落ち、室内は静寂に包まれていた。その中で唯一する音は、恭哉のページを捲る音のみだった。

お気に入りの紅茶に、中々面白味のある小説、恭哉にとって最高の状態だった。

恭哉は、ぺらり、ぺらり、と中々の速度で小説を読み進める。そして丁度、主人公達が犯行現場に向かうところで無粋なノック音が響いた。

「……鍵は開いている」

楽しみを邪魔された感が否めない恭哉だが、誰かは予想がついているため、口だけを動かして来訪者を招き入れた。

「恭哉、茶を淹れてくれ」

傍若無人なその言いよう、予想通り白崎綾乃その人だった。

「自分で淹れたらどうだ」

恭哉は素っ気なくそう答え、手元の小説の文面を追った。

「何故私が淹れなければならないんだ」

「なんだ、紅茶もお前はまともに淹れられないのか？」

茶を挟み、不敵な表情で恭哉は綾乃を挑発した。

「ふん、そんなもの出来て当然だ」

憤慨した様子で綾乃は台所へと消えていった。

「……苦い……」

飴色を通り過ぎ、黒みがかった液体を一口飲み、綾乃は顔を顰めた。

小さな声で言っただつもりなのだろうが、今ここには恭哉しかいないため、バツチリ聞こえていた。大方、熱すぎるお湯を茶葉に一気に注いだのだろう。

せっかくの茶葉もこうなってしまうては元も子もない。

恭哉は、苦みの出た紅茶を眺めている綾乃の姿を見て、本人に気

が付かれぬように小さく笑った。

シヨックを受けているようにも見えて、なんだか可愛く見てしま
う。

「……なんだ？」

綾乃は、不機嫌そうに恭哉を見やった。

「砂糖とミルクは必要か？」

「お前、私を馬鹿にしているな」

綾乃はすぐにむすつとした表情を作り、顔を顰めつつも大きく力
ツプを煽った。

「……………」

「……………」

お互いが無言のまま、どれほどの時間が過ぎたのだろうか。

恭哉は、一度閉じた小説の栞を抜き、再度読み始めた。

綾乃は依然として、仏頂面のまま、ちびちびと黒い紅茶を飲んで
いた。飲むたびに顔を顰めるのなら飲まなければよいものを、と恭
哉は思う。

しかし、彼女はそれでも飲み続ける。それはある種の意地の様な
モノだろう。

そう言った意志を感じるため、恭哉は敢えて止める事はなかった。
「……飲みきったぞ」

どうだ、と言わんばかりに胸を張る綾乃だが、恭哉は別段飲み干
せと強制した覚えはなかった。

「残してもよかったんだぞ？」

「ふん、この程度飲めないわけがないだろう」

小声で苦い、と漏らした割には威勢のいい返答に恭哉は再度苦笑
した。

文章を目で追いながら恭哉は、綾乃を見やった。

綾乃は勝手に彼のベッドに横になり、ゴロゴロと寝転んでいた。

一瞬、猫のようだ、と恭哉は思った。それも飼い慣らされた家猫ではなく、気の向くままに行動を起こす、野良猫のようだ。勝手に寛ぎ始めた綾乃を無視する形で恭哉は読書続けた。会話も特に生まれぬまま、お互いの夜は更けていった。

月島は、寮の小さなベランダに立ち、夜空を見上げていた。時より月島の頬を撫でるように吹く風は冷たい。

キラキラと輝く星空の元、月島は溜息を一つ吐いた。

「はぁ、駄目駄目だな俺って……」

項垂れるようにしてがつくりと肩を落とし、ぼやいた。

腕に付けた赤いブレスレッドをいじる。

F・Eの妨害装置、もとイリミッターにしては随分と洒落た造りだな、と月島は現実逃避気味に思う。

しかもこれが特注生産品なのだから笑えてくる。

月島は、元々赤い色はあまり好きではなかった。

どちらかと言えば、青のように着いた、クールな色が好きだった。

それでも月島は、敢えて決意に満ちた、情熱的なイメージの赤い色で発注をかけた。

理由は、戦隊物のリーダーはいつでも赤が務めているからだ。

月島は特撮作品が好きだった。

誰かのために戦う、とても素晴らしいことだと思った。

勇気と覚悟、そしてそれに伴う実力。

いつだってそう言った物語の主人公たちは、勇敢だった。

そんな彼らの姿に月島は今でも憧れている。

自分も誰かにとってのヒーロになりたい、そう思っている。

そうして間もなく、彼のF・E適性ランクの診断結果が届き、シヤドウと言う組織に入る事を決めた。

誰かの役に立ちたい、その思いが彼の行動の根本にあった。

しかし、今の月島はその心が折れ掛かってきていた。

アンノウンとの戦闘で、自分の能力の未熟さを知ってしまったからだ。

いくら動揺していたとはいえ、あそこまで無様に吹き飛ばされる事はなかっただろう。そんな自分に比べ、恭哉は能力を発動することなくF・Eを利用した二丁拳銃と体術のみで新型のアンノウンを翻弄し、倒していた。

そのことを今でも時々思い出し、その度に頂垂れてしまう。

月島は恭哉の強さに憧れを抱き始めていた。

最初こそはよく分からない奴だと困惑さえしたが、今は違う、純粹な憧れの気持ちを持てる。

「……もつと強くならなくちゃな」

月島の言葉は、冷たい夜風と共に流れていった。

一夜明け、日も高く上がったころ恭哉は、都市全体を一望できる高台のある公園にいた。

一度この街を見渡しておきたい、そんな気分になった恭哉は、この場所を訪れていた。

「あれれ、この場所に私以外の人が来るなんて珍しいかも」

「……………」

声のする方向に視線を向けると、中学生くらいの活発そうな少女が小首を傾げてこちらを見ていた。

少女は不思議そうに恭哉を眺めてから、備え付けのベンチへと腰

を下ろした。

「ねえねえ、あなたは座らないの？」

「……………」

恭哉はその問いかけには答えず、ただじつと眼下に広がる景色を眺めていた。

「おーい、聞こえてますか？あれれ、もしかして完全無視ですか？」

「俺に何か用か？」

「開口一番にそれはないと思います」

少女は非難の視線を恭哉に向けた。

「ここ、いい場所ですよ。街全体が見渡せて、尚且つ人が滅多に来ない。夜になれば夜景も綺麗ですし」

聞きもしないことをよく喋る奴だ、と恭哉は思いながらも話を傾聴していた。

「そうだ！ここでこうして出会ったのも何かの縁です。と、言うわけであなたの名前はなんていうんですか？私は水上燕っています」
勝手に自己紹介を始めた少女――水上燕はにこりと微笑みながら喋っていく。

「……緑川恭哉だ」

先に名乗られたのなら一応の礼儀として名を言うべきだ、と言うわけで恭哉も名を名乗った。

「緑川？珍しい名前ですね」

何がそんなに楽しいのか、燕は微笑みながら恭哉を見上げていた。
「緑川さんはこの場所に来たのは初めてですか？」

「ああそうだ」

「初めてでこの場所に来るなんて、中々センスがありますね」

「お前は、この場所が好きなのか？」

「もちろんです！」

その力強い返事に恭哉は目を細め、彼女を見やった。すると、恥ずかしそうにしながら燕はぼつりと語り出した。

「私、空を見るのが好きなんです。それで少しでも空に近い場所か

から見れないかなって探してたら、この場所を見つけたんです。えへへ、ちよつと変ですかね？」

「いいじゃないか、お前は結果として最高の場所を見つけた。それのどこがおかしいんだ？」

「えへへ、なんか恥ずかしいですね。でも、ありがとうございます」
俯きがちに言う燕を尻目に恭哉は、眼下の景色を眺めた。

彼女の言う通り、この場所は悪くない。

都会特有の無粋な喧騒も聞こえない、静かな場所だ。

「それじゃあ、私行きますね」

そう言い、その場を後にしようとした燕は、最後に話を聞いてくれてありがとうございました、と付け加えてからぺこりとお辞儀をした。

そんな彼女の後ろ姿が見えなくなったあたりで、恭哉もその場を後にした。

昼下がりの路上に停められた、あるバンの中にシャドウのメンバーが集結していた。

「この場所にアンノウンの製作者がいるんですか？」

エリアAと記された資料を片手に月島は、頭上に疑問符を大量発生させていた。

「そうみたいね」

コーヒーを飲みつつそっけなく答えるのはシャドウのリーダー的存在、矢車美咲だった。

美咲からの呼び出しを受け、月島、綾乃、葵、唯、の四人はこのバンへと集合していた。

そこで美咲から告げられた話は、アンノウンの発生場所の特定と、製作者の情報だった。

アンノウンが自然発生したものではないとは薄々感じていた月島たちは、それほど驚くことではなかったが、あれほど捜査が難航していたにも関わらず、ここにきてこの情報は話がよすぎる。

月島は、この情報に言い知れぬ胡散臭さを感じた。

「匿名で入った情報だし、私も正直信用ならないわ。でもそれは本部も同じなんでしょうけど」

「つまり本部は、私たちにその情報の信憑性を確かめて来いと言いたいのか……」

「そう言う事でしょうね、私もあまり気は進まないけど、本部の決定には逆らえないわ」

美咲の苦虫を噛み潰したような表情に、月島たちは一瞬押し黙る。これがもし嘘の情報で、罠だった場合、シャドウの壊滅は免れないだろう。

何とも言えない空気が車内を漂いだした。

「ともかく、一旦この場所を確認すべきじゃないか？ 唯、映像は出せるか？」

そんな空気を吹き飛ばすかのように力強い声色で綾乃が唯へと指示を出した。

「え、あ、うん。ちょっと待ってて」

カタカタ、と軽快なキーボードタッチで唯はパソコンを操作し、指定区域付近の監視カメラの映像を呼び出した。

「……見た目は普通の研究施設だね」

唯は映像を見ながらぼつりと呟いた。

彼女が言うとおり、そこには研究施設が映っているだけで、他に怪しいものはまったく映ってはいなかった。

「……ここは」

綾乃が息を呑むのを感じ振り返ろうとしたのと同時に、葵の声が重なった。

「ねえ、ここって拡大できない？」

「ちょっと待ってて」

何かを発見したらしく葵が唯へと指示を出した。

「ここ、警備員の数が少し多いと思わない？」

葵は拡大された映像を指差した。

「あ、言われてみると確かに多いね」

「仮にも研究所なんだし、普通じゃないのか？」

「……それならこのセキュリティチェックだけで十分な筈だ。

これを通してなければ内部には入れない。それなのに警備員を置いている、怪しいとしか言いようがないな。まあ、もともと、これも罠の一つだというのなら相手は随分と暇人なんだろうな」

突然饒舌に喋り出した綾乃は、皮肉るような口調でそう言い放ち、バンを出て行った。

確かに彼女の言うとおり、厳重なセキュリティチェックがあるにも関わらず、この警備員の数だ、これでは罠だとは思えなくても仕方がない。寧ろ、そんな場所には大切なものがあると相場は決まっている。

「……とりあえず施設とその周辺の情報を集めるか」

「つつきー一人じゃ大変だからあたしも手伝うね」

綾乃の言葉を受け、月島と唯は、施設の情報収集を始めた。

「……どうかしたのかな、綾乃。なんかすごく不機嫌そうに見えたけど……」

「確かにな……」

作業の手を止め、月島は思案顔の葵に同意した。

いつも凜としている彼女にしては珍しく、動揺が見て取れた。

それだけで何かがあると思うのは、勝手すぎる解釈だが、それが

綾乃なら話は別だった。

「一瞬だけど、綾乃がとても冷たく感じた。わたしたちとは違う場所に立ってる感じだった」

「……もしかしてこの施設、アイツに何か関係してんのか……？」

「あやのんって、少しミステリアスな部分もあるから」

綾乃の出て行った方向を見ながら唯が心配そうに呟いた。

燕と別れたあと、恭哉一人は街を歩いていた。
歩いて——そうして意図的に街の廃工場がある区域まで足を踏み入れた。

街を歩いている最中背中に感じたその視線は、明確な敵意を示していて、例えばどんな鈍感だろうとも気付くであろう程だった。

自身を餌に、恭哉はわざと気づかない振りをして、どれほど暴れても、決して人々の邪魔にならないだろう場所——この区間まで歩いたのだ。

自分を追ってくる者と言えば、大方裏を知る者だろう。

そして恭哉には追われるだけの理由があった。

日は傾き、夕暮れに染まった空の元、恭哉は立ち止まった。

「キミが緑川恭哉だね？」

随分と芝居臭い声色に恭哉はゆっくりと振り返る。

そこには白衣を羽織り、にやにやと胡散臭い笑みを浮かべる男が一人立っていた。この場に似つかわしくない格好だ。

「知らない顔だな」

「自己紹介がまだだったね、僕の名前は藤原京^{けい}。僕はキミに興味が湧いたんだ」

おどけた様子で男——藤原京は名を名乗った。

「生憎、俺は同性愛者じゃない」

「ふふつ、僕もそんなつもりはないよ。ただ、キミは面白い、僕の創ったアンノウンを能力も使わず倒したんだろ？ 凄いじゃないか」
大袈裟な身振り手振りで藤原京は喋る。まるで演劇でもしているかのような立ち振る舞いだ。

「だからね、キミの能力が僕は知りたい」

藤原京はそう言うとパチンと指を鳴らした、すると周囲に十六体のアンノウンが恭哉を取り囲むように現れた。

「これだけ用意すれば、キミも能力を行使せざるをえないだろう」

「趣味の悪い科学者だな」

「否定はしないよ」

恭哉はくりりと両手に銃を構え、目の前のアンノウンと相対した。
「ギイイイ!!」

アンノウンは、獣の鳴き声と金属同士を擦り合わせた時に生じる音を混ぜたような独特の鳴き声を上げ、六体のアンノウンが襲いかかってきた。

恭哉はその接近を許さないように両手の銃から銃弾を見舞う。

それを見たアンノウン六体は一旦後方に下がり、残りの十体が鱗状の物体を飛ばしてきた。

恭哉もそれを回避するために、建物の中へと入って行った。

外壁の剥き出しの金属に当たり、金属音が辺りに響いた。

「キミの能力はまだ見せてくれないのかい？」

藤原京の人を小馬鹿にしたような、声が聞こえる。

「それならもつと激しくいつてみようか」

指示を出そうとしたその瞬間、二体のアンノウンが脳天を撃ち抜かれ、消滅した。

「図に乗るな」

低い声でそう言い、恭哉は同じようにもう一体も撃ち抜いた。

「すごいねその銃、銃弾はF・Eを利用しているのか」

感心したように言う藤原京は、そのままメモに何か書き込んでいく。

十六体の内三体を失ったアンノウンの群れは一層けたたましく吠え、ブレードを広げ、

突進を始めた。

突進とはいっても、馬鹿みたいに突っ込むだけではなく、ちゃんと不規則に変化を加えてのモノだった。しかし、恭哉はそれらを正

確に撃ち抜き、消滅させていく。

藤原京の言う通り、恭哉の銃はF・Eを利用している。そのため発射する弾は自分自身のF・Eだ。

もちろんそれらを調整し、撃ち出す事など恭哉には朝飯前だった。先程の三体に加え四体を失った群れは、残り九体となった。

恭哉の正確な射撃に対し、アンノウンたちは次第に防戦一方となっていた。

近接が最も得意なタイプであるこのアンノウンたちは、対象に近づくことが出来なければ、大した脅威ではないのだ。

それをすでに理解している恭哉が、この程度の数で負ける道理はなかった。

「そうだよ、この型^{タイプ}じゃだめだよ」

藤原京はなにやら納得した顔で呟き、再度指を弾いた。すると、三体ほどのアンノウンが変化を始めた。

脱皮に似たそれは数秒で終わり、新たな装備を持ったアンノウンが生み出された。

両腕に付いていた大きなブレードは鳴りを潜め、代わりに砲門のようなものが付いており、外装も以前より幾分か強固そうなものに変わっていた。

「ほう、戦いの中で進化していくのか」

「飽きないだろ？」

藤原京が喋り終えるよりも早く恭哉は回避行動に出ていた。

新型三体の腕に備えられている砲門から、物凄い速度で何かが発射されたからだ。

廃屋の鉄骨部分に当たり、刺さったそれは骨のようにも見え、不気味さが漂っていた。

新型が恭哉の逃げ込んだ廃屋へと連射を続ける中、残りの六体はその周りを取り囲むように動き出した。

このままでは今は大丈夫でもいずれ支柱が割れて、崩れてしまうだろう。

恭哉は新型の銃弾が徐々に壁面を貫通していき、穴を開け始めているのを感じた。

どうやら、藤原京は本気で能力を使わせようとしているらしい。相手の思惑通りに動くのは気に食わないが、自身の能力を隠す必要はない。寧ろ少し調べればすぐに割れるだろう。

藤原京がそれをしていないのは、実物を見ないと落ち着かない性質タイプなのだろう。

「いいだろう、見せてやる。これが俺の能力だ」

徐々に崩壊を始めた廃屋内部で恭哉は、すつと息を吐き、目を閉じて体の力を抜く、そして次に瞼を開いた時にはその瞳の色は紫へと変化していた。

「おや、もしかして死んじやったかな？」

崩壊を始めた廃屋を見て藤原京は思惑が外れたとばかりに、落胆した様子を露わにした。

しかし、次の瞬間その表情は待ち侘びたものを手に入れた子供のようなものへと変わった。

崩れた廃屋を切り裂き、虹彩が紫へと変わった緑川恭哉がその場に現れた。

「……日本刀？それが君の能力はなのかい！？」

左手に携えた刀を見て、藤原京は興奮気味に捲くし立てた。

「お前に答えてやる義理はない」

刹那、藤原京は背筋が凍る程のモノを恭哉から感じ、自身の前に最大出力で防御壁を展開した。

恭哉は、刀を居合い抜き型の型で構え、一閃。たったそれだけの動作なのにも関わらず辺り一帯がすっぱりと斬られていた。

当然、新型を含めた残り九体のアンノウンは成す術もなく斬り伏せられ、辺りにアンノウンの黒っぽい体液が飛び散った。

「……逃げたか、随分と逃げ足の速い科学者だ」

刀を消し、虹彩も元の黒に戻した恭哉は、藤原京の立っていた場所を睨みつけそう呟いた。

「あはは……はははっ！！素晴らしいじゃないか、キミの能力。確かに僕は見たよ！！」

狂ったように笑い、喋る藤原京は切り裂かれ、出血した右腕を止血のため押さえながら歩いていた。

あと一瞬、防御壁の展開が遅ければこの右腕は完全に失われていただろう。防げたとは言っても、完璧にはなくもしもう一度あの鋭い斬撃が見舞われていたら自分は死んでいただろう。

その事に藤原京は戦慄しつつも言い知れぬ満足感に浸っていた。

「はははッ！！いい人材だ、緑川恭哉。僕はキミに心奪われそうだよ」

藤原京は不気味なほどの笑い声をあげ、闇夜の街へと消えていった。

「……まだ存在していたのか」

綾乃は公園のベンチに座り陰鬱な表情浮かべていた。

ゆったりと流れるように漂う雲が、今はどうしようもなく鬱陶しく感じた。

綾乃の脳内に思い出されるのは、ある科学者の顔だった。

常になにやと胡散臭い笑みを顔に張り付け、自分に接してきたその男の顔を綾乃は一生忘れることは出来ないだろう。

その男によって生み出された自身の能力、あの男は『パンドラ』と呼んでいたこの能力はF・Eの利便性の証明だといい、随分と持

て離されたものだっただ。

しかし、当時の綾乃は今ほど能力適性ランクが高くなかった。そのため、具象の持続時間はそれほどでもなかった。だが、それでも彼女の攻撃力は群を抜いていた事だけは事実だった。

ふっと息を吐き、綾乃は過去の回想を止めた。

いくら思い返しても今更過去は変えられない、変えることが出来とすれば、ここから先の未来だけだ。

「……あの男と施設は必ず私の手で潰す」

綾乃は怒りとも憎悪とも取れるような表情でそう宣言した。

恭哉は、自室で紅茶を飲みながら寛いでいた。

それにしても随分と面倒な相手に目をつけられたものだ。

藤原京は自らがアンノウンの開発者だと名乗った、そしてそれは十中八九フェイクではないだろう。

「しかしあの能力……」

しかし、当の恭哉は、そんな事よりも藤原京が咄嗟に展開したあの防御壁に興味を惹かれていた。

恭哉とて本気で放ったわけではないが、それなりに力を込めた一閃を防ぎ切ったのだ。それに興味が湧くのは仕方のない事だろう。

「……藤原京か、次に会う機会が楽しみだな」

恭哉はそう呟き、紅茶の入ったカップを優雅に口へと運んだ。

あの様子なら近い内にもう一度あちらから何かしらのモーションを仕掛けてくるだろう。

「恭哉、いるか？」

「鍵は開いている」

短いノック音のあと、いつもより若干覇気を感じられない綾乃の声が聞こえてきた。それに対して恭哉はいつものように受け答え、彼女の入室を許可した。

「飲むか？」

「いただく」

恭哉の使用している紅茶用のカップのペアは、既に彼女専用のものとなっていた。

綾乃がこの部屋に訪れ、紅茶を飲んでいくのはもはや習慣と化しており、今更それを咎める気もない恭哉は、彼の使用する紅茶専用の茶器と同じ――俗にいうペアカップの片割れを使用させている内にいつしかそれは彼女専用のものとなっていたのだ。

手際よくカップにラベンダーティーを注ぎ、恭哉はベッドに座る綾乃の前へと置いた。

どうも前回寝転んだ際にその場所が気に入ってしまったらしく、綾乃はそこを動くそぶりを一切見せなかった。

「む、今日のは味と色が違うな……」

「口に合わなかったか？」

どこか落ち着かない様子の彼女のために恭哉は、いつものアールグレイからリラックス効果があると言われるこの茶葉に変更したのだが、一瞬彼女が眉間に皺を寄せたのを見て恭哉は、ラベンダー特有の香りを和らげるためにハチミツでも入れておけばよかったか、と思い直していた。

「いいや、相変わらずお前の淹れる紅茶はおいしいな」

「ほう、今日は随分と素直じゃないか。どういう心境の変化だ？」
いつになく素直に味を評価する綾乃に、恭哉は何かを感じ。じつと観察するような目を向けた。

「ふん、私だっておいしいものには順当な評価を下すさ」

「そうか、それで今日は一体何の用だ。何か聞いてほしい話があるような表情だが？」

恭哉は、まるつきり興味の無いような声色から一気に真面目な声色に変え、話題を転換した。

ラベンダーティーを出したのも彼女をリラックスさせ、話しやすい環境を作ろうと思った彼なりの気遣いからだった。

「……いや、何でもないさ」

「そうか？話したくないのならそれでいいさ、俺はいつでも聞き手くらいにはなってる」

歯切れの悪い綾乃を諭すように、安心させるように、恭哉はかつてないほどに優しい声色で話した。

「……お前」

これにはさすがの綾乃も面喰ったようで珍しく両目を大きく見開いていた。

そんな珍しい綾乃の様子に、恭哉はしてやったりとキザっぽく笑った。

話したくないのなら、無理に話させる必要などない、ましてや彼女とはそんな仲ではないのだから。

だが、もしこの場に来ることで少しでも彼女の抱えている何かが軽減されると言うのなら、思う存分来ればいい、とそんなことを思う程度には恭哉もなっていた。

彼女とこうして過ごすのは不快ではない、寧ろどこか安心感さえ覚えた。

そんな妙な感覚を感じながら恭哉はゆっくりと紅茶を啜った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3713w/>

Luce e Ombra ~ 光と影 ~

2012年1月5日20時48分発行